

艦これ南の島生活

うずしお丸

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「誰だ、では無いのであります。自分はあきつ丸。本日付でこの僻地に派遣された揚陸艦でありますよ」

南の島、リングガ泊地に異動させられたあきつ丸。彼女を待っていたのは呆れるほどボロい建物に住む泊地の仲間たちだった。

五月雨・涼風・夕立・明石・伊58・伊500、そして提督とその娘と過ごす日々の中で、あきつ丸は次第に泊地の一員となっていく。

しかし平和の裏には《六年前の地獄》が隠されていた――
これは、艦娘たちの『願い』についての物語。

※この作品はコミックマーケット89にて、同題で発表した内容を掲載したものです

目次

1 | 1. 黒い艦娘 | 1

1 | 2. 歓迎 | 6

1 | 3. 海上哨戒 | 12

1 | 4. 夕食時 | 23

2 | 1. 夜 | 32

2 | 2. ろーでち | 41

2 | 3. 熱病の雨見／保健室の明石

55

2 | 4. 五年前 | 61

2 | 5. 悪夢と胸騒ぎ | 85

3 | 1. 雨見の失踪 | 89

3 | 2. 洞窟にて | 93

3 | 3. レ級 | 106

3 | 4. 瀬戸の回想 | 111

4 | 4. エピログ | 117

4 | 1. あきつ丸VS | 120

4 | 2. レ級2 | 126

4 | 3. 帰還 | 132

4 | 4. エピログ | 142

1—1. 黒い艦娘

降り注ぐ太陽の光が、海の底まで照らしている。波間には層を成す珊瑚礁が覗き、魚たちは森林浴をするように遊ぶ。海面下は揺蕩う色彩の王国となり、生命に満ち満ちていた。

一方地上は灼熱地獄であった。今、真つ白な反射板となった砂浜を、黒い艦娘が、ふらり、ふらりと歩いている。彼女の病的に青白い顔は猛暑に引きつり、目に灯るべき生氣はほぼ失われていた。そうして歩き続け、やがて浜の先にある岩礁に腰を下ろす男の前で足を止め、口を開く。

「やつと……見つけたであります……」

男は短髪にランニングシャツ、白い夏袴の出で立ちで、釣り糸を海面に垂らしていた。白い軍帽が岩に引つ掛けてある。それを見て黒い艦娘は己に空元気を注入した。

「ごきげんよう、釣果はありますか？」

そう言い直して、腕を自らの背に回して、男の背後から彼女は近づいた。そうするの
が洒落ているとでもいうように。

「いやあそれにしてもまったくたまらない暑さですなあ。貴殿を見つけるまで相当歩か

されたのでありますよ。自分、生来日照が苦手でありまして、次からは冷房完備の屋内で待つてもらいたい。して、自分の歓迎パーティはどこで開かれているのでありますかな。まずはキンキンに冷えたラムネでも頂きたいなあ。それから豪華な食事であります。血沸き肉踊るステーキを所望する。自分、小食なので、厳選された美味しいところがちよつとだけあればいいのであります。」

男は微動だにしない。黒い艦娘の方には一瞥もくれず、海面を見据え続けている。

「えっ、無視？」

今まで猛暑を歩かされたせいか、感情と人格を失った声が出た。ようやく男は彼女の方を見上げる。

「ああ？ 誰だ貴様」

男は太陽が眩しそうに睨みつける。

「誰だ、では無いのであります。自分はあきつ丸。本日付でこの僻地に派遣された揚陸艦でありますよ。しかしまさか通達が行っていないとは……この泊地はもう終わっているな……」

色々と不満が噴き出しているあきつ丸。しかし男はそんなことには気に留めず、片眉を上げる。

「ああ、お前が新しく来た艦か。話は聞いている、今日からうちの艦隊に加わるらしい

な。よろしくな」

ふむ、と彼女は首を傾げる。

「話は聞いている…？　よろしくな？　ならば、自分の歓迎パーティーはどこで催されているのでありますか」

最大の謎が、彼女にはどうしても解けない。

「歓迎パーティー？　そんなものが必要なら先に言っておけ。まあ喜べ、ここで釣った魚を、晩に振る舞つてやる予定だ」

「魚でありますか」

「なんだ、魚はダメか？　ここの魚料理は旨いぞ、食つてみれば分かる」

「いや、そうではなく…、なんだかその場の思いつき感があるというか…もつと、出迎えてか…：歓迎とか…」

あきつ丸はぼやき出す。彼女はここに来るまでのフライトを思い出していた。彼女の意識が数時間前までに遡っていく。

赤道直下の国、インドネシアはリングガ泊地に、あきつ丸は飛ばされていた。便宜的に「人」と呼ぶなら、人事異動であった。全く予期せぬ異動であった。精鋭の艦が集まる呉鎮守府から、何の噂も聞かないリングガ泊地へ、有無を言わず異動させられた。

空港でジャケット買った洋楽を聴きながら、サングラスの下であきつ丸は目を閉じ

ていた。リクライニングに響く飛行機の振動を微かに感じながら、彼女は歓迎されるべき自分の姿を想像していた。彼女は歓迎されねばならなかった。

何せ自分は大本営直々の命によって呉から派遣された超エリート。陸軍とのパイプも隠し持つ大本営秘蔵の艦。彼女は容易に想像することができた。自分を囲む泊地の面々、劳いの言葉、羨望、期待の眼差し、そして豪華な食事。果たしてどのような厚待遇が自分を待っているのだろうか。せいぜい期待に胸を膨らませてやろう——

そう考えないとやっていられなかった。あきつ丸は知っていた。南国の楽園なんて、所詮、南洋幻想に決まっていることを。暑いだけの常夏の島など、どこを見渡しても馬鹿ばかりであろう。どうして自分が、この自分が左遷、何故……。苛立ち紛れに頬張ったポップコーンが喉に詰まってむせ涙が出た。

そうして降り立ったインドネシア、リングガ諸島のあばら家を訪れたとき、あきつ丸はそこが鎮守府の機能を有する泊地であるとはすぐに認識することができなかった。鄙びた村のさらに外れ、周りを囲むは旅人の木。トタンと塩ビ波板で補修されたそのその木造一軒家こそが、リングガ諸島の防衛を任せられた泊地であった。

その家の前であきつ丸が戸惑っていると、中からエプロン姿の駆逐艦五月雨が現れる。自身が本日付で着艦することになったあきつ丸であることを伝えると、話は聞いていると五月雨。ところが、いま提督は不在なんです、と彼女は言う。申し訳ないけれど、

今はどうしても手が離せない、料理の火の番ができるのが自分しかいない、だから一人で提督を探して欲しい、と濟まなそうに続ける。それから提督の居場所を書かれた地図を持たされ、再三頭を下げられてしまつては、あきつ丸も面食らつたように引き返すしか無かつた。

というわけで、全天の日射を一身に受け、指示された場所に向かつた黒い艦娘あきつ丸。その道程は当初思つていたより長かつた。二、三時間は浜を歩いたか。しやり、しやりと砂が鳴る。本当だつたら今頃、自分は呉の自室で、紅茶でも飲みながらゆつたりと読書をしていたのに、と妄念が浮かんでくる。そのような理想を一度でも思い浮かべてしまうと、この現実というものに実感が持てなくなり、自身が否定されているような苦しさを感じてくる。酷暑にあきつ丸の心身が屈服し始めた頃、岩礁の上で釣りをしている男の姿が見えてきたのだった。

「どうした。おい、聞こえてるか?」

「提督殿……」

これまでのことを思い出しながら、肩を揺さぶられるあきつ丸。その朦朧とした意識の中で、彼女は言う。

「せめて……せめて自分は、個室が欲しいであります……」

そして彼女は熱中症で倒れた。

1—2. 歡迎

甘いような、辛いような、鼻腔をくすぐる食べ物香りであきつ丸が目覚めると、目の前にちやぶ台があつた。それを大勢の人物が囲んでいる。何やら賑やかに話をしてゐる。その人物一人ひとりの顔を眺めるが、見たことがあるような、ないようなである。未だはつきりと覚醒していなかつた。あきつ丸が自分の額に手をやると、手ぬぐいが湿つてゐる。自分が浜で倒れたあと、提督にここまで運ばれ処置されたらしい。

「おっと、目が覚めたか」

正面奥に胡座をかいてゐる提督が気付いた。その右隣にはエプロン姿の五月雨が座つてゐる。その隣で、肌の焼けた老爺と老婆がここにこしながらこちらを見ていた。ちやぶ台の上には郷土料理だろうか、見慣れぬ料理が並んでゐる。

「予定はしていなかつたが、お前の歓迎会だ。なかなかのご馳走だぞ。近所に住む老人夫妻が料理を作つてきてくれたのだ」

「作りすぎちやつたから食べるとイイヨ」

「思いつきり日本語で喋つてゐるのであります」

指摘をしても、老人夫妻は嬉しそうにしている。

「このご夫妻は、大戦時に泊地の日本兵と親しくされていたそうだ。その時に日本語を覚えたらしい」

「家族揃って食ベル風習、インドネシアにはナイ。こうシテ皆で食ベルのも良いモノだと、私ハ思ウ」

老人が頷く。

「なるほど…。まあそれは良いとして、泊地の人員はこれで全てでありますか。なんとも、寂しいところですか」

すると、この泊地は提督と五月雨の二人で切り盛りされてきたのか。それは凄まじいことである。こんな僻地に配属されてしまった自分の不幸をあきつ丸が呪いそうになったところで、提督は言う。

「いや、今は全員が帰ってくるのを待っているところだ。そろそろ帰ってくるはずだ。それまでは話でもしていようじゃないか」

全員が帰ってくる。あきつ丸は納得する。ああつまり、主力艦隊は出払っているということなのだ。ということとは、まともな人員がいるということだ。良かった、もう少しでこの泊地を見限るところだったと、あきつ丸は安堵した。自分は早合点するところがあつていけない。五月雨の方を見ると、何故か申し訳なさそうに彼女は目を逸らした。

「そういえば、名乗るのを忘れていたな。俺は瀬戸塔也、階級は大尉、リング泊地の提督

に任じられている。改めてよろしく」

「ええ、よろしくであります。先ほどは非礼をお詫びしたい。慣れない環境に取り乱してしまつたようだ」

「ああ、別に気にしていない、大丈夫だ。こっちは俺の秘書艦をやつてもらつている、白露型の五月雨」

ペこりとお辞儀をすると五月雨の透き通るような長髪が揺れる。白いセーラーに、タイトな長手袋が印象的だ。彼女とは先ほど会つてはいたが、とりあえず目礼しておく。その時にも、お互いの名前は名乗る前から分かつていた。艦娘の間には、名乗らずとも相手が何の艦なのか分かるといふ同調現象が起こることがよくある。

外が騒がしかった。たくさんの足音が駆けてきて、笑い声が近づいてくる。何事かと思ひ三和土の方に目を向けると、玄関の戸が勢いよく開いた。

「あたいがいつちばーん！」

「ろーちゃんもですつて！」

と、続けざまに入つてきたのは身体中泥だらけの駆逐艦と潜水艦。一方は制服から五月雨の姉妹艦だろうか、セミロングに活発そうな瞳は涼風だと推察できる。もう一方の艦は、名乗つた名前から、呂500だろう。ばつちり焼けた肌と、白金の髪にサツキの飾りが非常に明るい印象を与える。

それからぞろぞろと艦娘が帰ってくる。

「競争じゃねーでち！ 全く……」

「明石、ただいま帰還しましたー」

と、敷居を跨ぐ潜水艦と工作艦。二人の間に、見慣れない少女がいる。5歳か6歳くらいの子もだ。

「ただいま帰りました、お父さん」

少女は瀬戸提督に向かって言う。

「おかえり、雨見。さあ皆、早くシャワーを浴びてくるんだ。飯を食うには汚れすぎてい
る」

「えー、提督それってセクハラじゃないですかあ？」

明石が軽薄な感じで絡む。

「口答えするな、早く入れ。待っている奴がいるんだ」

「あれ、その黒い人、今日着艦したっていう噂の子ですね。よろしくね」

「あきつ丸であります」

「うん、私は工作艦明石。積もる話はまた後でね、提督が怒ってるみたいだから」

「別に、怒ってはいない。規則を順守するよう言っているだけだ」

「はいはい」

あきつ丸の目の前で慣れたような言葉が交わされる。

「ところで明石、夕立はどうした？ 姿が見えないが」

「あー、ほんとだ。途中までは一緒だったんですけどねえ。あの子目を離すとすぐどこか行つちやうからなあ」

「まあいい、どうせいつもの場所だろう。俺が連れてくる」

「ああ、わざわざすみませんねえ。でもあんまりあの子を子供扱いしても仕方ないですよ」

瀬戸は明石の忠告には答えず、艦娘たちと入れ替わりに家を出て行った。

「うーん。提督はなんでか夕立に甘いからなあ。あ、すみませんシャワー頂いてきますね」

明石はそう言つて土間の奥へ消える。そこが恐らくシャワー室になっているのだろう。しばらくして、きやあきやあとはしゃいでいるような、くぐもった声があきつ丸のところまで聞こえてきた。急に騒がしくなった家の中に、あきつ丸は五月雨の方を見る。

「ごめんなさい……うち、いつもこうなんです」

「あー。自分は、完全防音の個室さえもらえればもうそれ以上は何も望まないであります」

「雑魚寝なんです…」

「帰りたくないなあ!」

初日からこみ上げてくるホームシックに、あきつ丸は目眩がした。

すると、提督が夕立を連れて戻って来る。

「ううーごめんなさいー。夕立、夢中になると色々忘れちゃうっぽい」

「分かつてる。ただ、単独行動をするときは明石に伝えるように言った筈だ」

「それも忘れちゃったっぽい…」

「…そうだな。一つずつ覚えていこう。とりあえず今は飯だ。その泥を落としてくるんだ」

「はーい。ごっはんーごっはんー」

夕立を連れた提督は、そのままうっかりシャワー室の扉を開けてしまったのだろうか。ガチャ、と扉を開ける音と、騒ぎ声が聞こえたのがほぼ同時で、それも少し楽しそうに中の皆が叫ぶ。鳥かごを開けた瞬間に飛び出す白鳩たちのように、きやあきやあが一斉に開放される。

「本当にごめんなさい、本当に…」

「もはや何も言うまい」

あきつ丸は、閉口した。

1—3. 海上哨戒

太陽は一周回って再び頭上にある。水上に四条の白波が立っていた。尾を引くように海を滑走するのは、四つの人影。それに追隨するように、二つの魚影があった。いや、それも人の影、艦娘の影。

「今日は敵さんもないんじゃないでち？　こんないい天気で、補給船なんて動かないと思うなあ」

海面から顔を上げた伊58は、艦隊帰還を打診する。そう言った彼女に向かって、夕立が頬を膨らませた。

「えーっ、今日は一度も戦ってないっばいー。まだ帰りたくないー、酸素魚雷打ちたいー」

夕立はいやいやをする。駄々をこねる夕立を、この中で一番の年長者らしい明石が、そんな日もあるってばと宥める。

照りつける太陽の中でも、波の上を思いつきり走ると、飛沫がたつて心地よい。天然のクーラーの中にいるようで、涼風は伸びびをして目を細める。

少し離れた場所で潜水中の呂500は、透き通るような海の底に沈んでいる鉄くずの

塊を、不思議そうな面持ちで眺めていた。珊瑚や苔に覆われて錆びついたそれをよく見ていると、突き出た両端の鋼は鳥の翼のように見える。とすると、二つに別れたあの塊は、折れた戦闘機の胴体だろう。崩れたキャノピーの内側には魚群が棲みついており、趣向をこらした水族館のようだった。

「a c h s o」

漏れた吐きが泡となって、海中を昇っていく。

あきつ丸は艦隊の最後方で、ため息をついていた。何だろう、この緊張感の無さは。呉ではあまり戦闘に駆り出されることのなかつたあきつ丸であるが、哨戒とは本来こういうものだったろうかと思案する。戦闘の最前線で日々繰り返し返されていた命のやり取りを、当事者ではないが間近で見ている者からして、ここでの業務はピクニックのように見えた。命を懸ける現場特有の張り詰めた空気が感じられない。

「これも元々この地域の警戒度が低いせいか…環境が異なれば戦況も違うのでありますな」

そう独り納得するあきつ丸。南西諸島周辺は、周囲が島に囲まれているために深海棲艦が入り込みにくく、水深が浅いために敵の出没ポイントも限られている。つまり、不意打ちの危険性が少ない。海軍の上に位置する組織である大本営は、この近辺の海域を、最も安全な戦線のうちのひとつと評していた。

それでは今自分たちは何をしているのか。あきつ丸はもう一度任務を確認しようと、昨晚読んでいた業務日誌の内容を思い出す。最近の泊地の艦隊業務は、敵補給船の進行ルートを補足し打破することであった。その際に可能ならば敵の根拠地を押しえられたいしいし、敵のはぐれ艦隊などとの会敵が見込まれるために、一応の警戒は必要であるとのこと。

なるほど、これは腑抜ける、と彼女は思った。

あきつ丸の目の下は黒い。慣れない雑魚寝に、昨晚はあまりよく眠れなかったのだ。それから南洋の食事も彼女の身体に合わなかったらしく、何度か厠に立ってしまった。こういう神経質なところが自分の欠点だと自戒してみるが、人としての性質だけは変えようがないとも彼女は思う。軍靴に搭載された小型蒸気タービンを回す熱で身体は火照っていたが、あきつ丸の心内は高揚とは程遠かった。

「おーいあきつつあん！ 状況はどうだい？」

よく通る声で涼風が言う。あきつ丸はただ後方に位置していたわけではない。力合観測機というヘリによく似た艦載機を飛ばし、海上を監視していたのだ。あきつ丸はそれからの報告を手元の幻燈機に受け取る。

「うーん、敵影ナシであります。っていうか、おやつさあん！ みたいに言わないで欲しい」

「なんだい、じゃあもう少し見回したら、帰投しようか」

艦隊の旗艦である涼風が方針を決める。潮風に黒髪がなびいている。

ところが、観測機に反応があつた。前方十一時の方角に、船影アリ。大勢の人間を載せた、商船が見えた。あきつ丸は観測機から送信されたその映像を確認する。上空から近づく観測機に気付き、手を振る乗船員。それは観光客がカメラに手を振るようなものじゃない。深刻な顔で次々に身を乗り出し、必死に宙に縋りつこうとしている。彼らは助けを求めていた。それも逼迫するような至急のものだ。

「商船であります。何か異変が起こっているようだ」

あきつ丸は艦隊にその報告を伝令した。何か通常ではない事態が起こっているようだ。

「いや、あれは何だ：？」

彼女は力合観測機から更なる報告を受けた。商船のその先、獲物を付け狙うフカのような魚影が四つ見える。生き物の臭いを辿ってきたのか。浅黒い鋼殻が海面に覗くと、それが深海棲艦の群れであることが分かる。

「敵艦発見！ 商船の先、十時の方角であります！」

そう言ったあきつ丸の、全身を空気が包み込む。艦隊の雰囲気、先ほどまでとまるで異なっていた。年頃の少女らしく喋っていた彼女たちから今やヤワさだけが弾け飛

んで、充滿する精神に口を固く結んでいる。笑つてみせる者さえいる。特に夕立は、あのような姿だったろうか、爛と輝く瞳に、その立ち姿に、狂気が滲んでいるような氣すらした。

「おつしやー！ 行くぜ皆、全機爆走、標的はぐれ艦隊！」

涼風の号令に、応と声を上げて皆が走りだす。その勢いに、あきつ丸は若干と出遅れてしまった。

ああ、忘れていた。艦娘とは、こういう存在だった。人の身には過ぎた力を發揮する機会があれば、心の何処かで嬉しいのだ。枷が外れて、少しでも自由な飛翔に近づける氣がするから。

かくいうあきつ丸も自身の腹の底に火が灯されたのを感じていた。目を閉じる。この熱が人命の為に駆動するのならば良い。いま、商船の人々は自分たちに助けを求めている。艦娘の力が求められているのを強く意識した。それだけであきつ丸は何にも負けない氣がしてくる。どこまでも走れる氣がしてくる。やることはたった一つしかなかった。

すぐさまあきつ丸も艦隊に追いつく。商船の元で明石は、乗員たちに安心するよう言っていた。

「私たちが来たからにはもう大丈夫です。すぐに危険は取り除きますからね！」

後方十数メートルの地点に駆逐イ級の群れがいる。特定の統制作用や、人型深海棲艦の司令塔は見られない。いわゆるはぐれ艦隊であると認識した。

駆逐イ級のその姿を例えるなら、鋼鉄で武装した鮫だろうか。生物という見方を捨てれば、鋭く研磨された砲弾のようにも見える。しかしそれはこの深い海のどこかで生まれた生命に違いない。深海より現れたゴーストシップと、誰かが呼んだ。

既に艦娘たちは戦闘を開始している。白波が交差するように立ち、涼風と夕立は標的を惑乱する形で迫る、その隙に伊58と呂500は海中深くに潜っていた。イ級は海上の二人を見据え、鉄門のような頤を開く。粘膜を引き裂き喉の奥から現れた5inch単装砲が、彼女らに向けて鉛弾を一斉射。それを難なく躲した涼風と夕立の前に、次の弾幕が予備動作無しに直ちに張られた。葉莢はもろとも呑み込まれ、イ級の体内で生成された火薬の反応煙が、油で濡れる喉の奥から立ち上っていた。

直後、轟音と共に直径十メートルほどの水柱が上がる。海上に突き抜ける泡の壁に、二体のイ級の胴体を引き裂かれるのが垣間見えた。伊58の酸素魚雷が着弾したのだ。キャビテーションの圧力は、分厚い鋼鉄の甲板も容易に引き裂く。その奥で標的から逸れていく魚雷の軌道があった。ウェットヒーター式の雷跡が海上に刻まれている。

魚雷を起爆させるには、動く標的に対して正確に信管部を当てなければならぬ。惜しくも標的を逃したあの魚雷は、先の魚雷を発射した艦、伊58の練度の高さを物語つ

ているといえた。

ところが、逸れた筈の魚雷は数百メートル進んだ先で飛沫を上げて轉身、その後またあてずっぽうな方向に直線運動をしては轉身を行う。そうして変針を幾度も繰り返しながら、その兵器は猛烈な勢いでイ級との距離を縮めていった。標的を平面的に模索する試製Fat式魚雷その近接信管が、イ級の生体反応を感知する。

デトネーション。次いで起こる空洞現象による水圧の衝撃が、イ級の顎部を吹き飛ばし、鉛色の内臓を暴露させる。

「やったあー！ ろーちゃん上手にできましたー！」

「あんなもん撃てば当たるに決まってるでちー！」

伊58が呂500の特注兵装に文句を言っている。

降り落ちる水飛沫、火薬と油と鉄錆に似た血の臭い、浮かぶ深海棲艦の破片の中に紛れて、たった一匹生き残ったイ級の瞳が嚇と光る。その口から突き出る単装砲の照準が呂500に向いたとき、上空を白く長い髪が舞った。

「ソロモンの悪夢、見せてあげるー！」

飛沫の中へ高く跳躍した夕立が、俯瞰の視点から残党を狙う。鋭い砲声と共に、イ級の頭蓋を夕立の連装砲が精密に撃ち抜いた。

そのまま夕立は敵を飛び越え着水。イ級の体内火薬からは爆炎が上がり、それから声

も上げずに海の底に沈んでいった。

「やるねえ夕立、また腕を上げたんじゃないかい？」

「うーん、これで終わりっぼい？」

涼風の労いに、夕立は物足りなさそうな慣性で海を滑っていた。

敵は少数の駆逐艦のみで編成されたはぐれ艦隊であったが、一瞬のうちに海域を制圧してみせた味方の腕前にあきつ丸は舌を巻くほかなかった。中でも夕立の運動性能は異常値ではないだろうか、あのような三次元的な戦い方をする艦娘は、呉でも見たことが無い。そういえば、駆逐艦夕立の二つ名は「ソロモン海の狂犬」であったか。

ともかく、周辺の安全を確保することができた。艦娘としての役目を果たした艦隊は、商船の方へと向き直る。

乗船員たちは未だに怯えている。無理もない、とあきつ丸は思う。怪物に襲われていたところに年端もいかない少女たちが海上を疾走して駆けつけ、突然現代兵器を用いた大立ち回りを演じたのだ。常識的に考えてみて、あきつ丸は少し笑ってしまう。状況を飲み込めないのも当然だ。

見ると、商船に乗っているのは子どもたちが多数である。みな南洋の人間らしく、肌の色は浅黒い。あきつ丸は、乗船員たちの緊張をほぐそうと、軽く声を掛けようとした。「もう心配はいらないでありますよ」と。

トリガーの上がる音がして、あきつ丸の目の端から、金属状の円筒が伸びた。工作艦明石が乗船員に対し、25m機銃を向けている。あきつ丸は目を疑った。人々の顔は青ざめ、船上の子どもたちは恐怖に身を寄せあっている。

「ちよつ、明石殿、何をやっているのですか?」

状況が飲み込めないあきつ丸を涼風が手で制した。明石は言う。

「何か怪しいと思いましたが。深海棲艦の蔓延のご時世、商船を走らせるなら泊地に一報を入れるべきです。その申請もなくこんな多くの子どもたちを連れて、どこに行こうっていうんでしょう?」

明石はこの船の船長であるだろう男を見抜き、彼に銃口を定めている。ほとんどの子どもたちは布切れ一枚ばかりの見すばらしい格好をしていたが、大人たちは随分とまともな生活をしているように見えた。

「この子どもたち、恐らく先日の震災によつて行く宛を無くした者たちでしょう。あなた方は彼ら彼女らを外国へ売ろうとしている。違いますか?」

明石は当然のように、男たちに分かる言語を使用する。怯えた目で艦娘を見上げる子どもたちが、その眼の奥で真の助けを求めていることに、あきつ丸は難民ビジネスという単語を思い出し眩きが漏れる。

「なんて」とだ…」

艦隊は、難民を売り物にする裏世界の現場に直面していたのだ。明石は操舵員に機銃を向け強い口調を崩さない。

「さあ、船を岸まで戻しなさい。そこであなたたちの身柄を拘束します。抵抗できると思わないでくださいね。先ほど私たちの武力は見せた筈ですから」

その後あきつ丸たちは、操舵員を残して大人全員の手足をロープで縛り、身柄を拘束した。陸に着いてから、駐在の警官を呼び男たちの身柄を引き渡す。それから子どもたちの身元を一人ひとり照合しながら、各自治体に連絡を取り、国境を越えて活動を行っている非政府組織にも救援と事件の解決を要請した。非政府組織の職員が来、事の顛末を話すと驚かれたが、自分たちが泊地の艦娘だと説明すると納得したようである。

それから、拘束した男たちの情報を聞いた。彼らは震災によつて住む家や家族を失い、身寄りも希望も存在しない子どもたちに、外国には楽園がある等の情報を吹き込んで連れ去り、売春婦や奴隷として売りつけている人身売買組織の一員であった。その組織の全貌は今まで杳として知れなかったが、今回の現行犯の阻止は、その摘発の一助となるかもしれない。

ところが、子どもたちの中には、未だ外国に行くことで救われると信じている者がいる。あの船の中にもそういう者がいたことを、非政府組織の職員は言う。だとしたら、あの時彼ら彼女らの目に映っていたのは、六人の救済者ではなく、救済の糸を切つてく

れた悪者であつて、艦娘たちを恨んですらいた筈である。あの時あきつ丸たちを見上げていた視線の一つ一つには、本当は様々な感情が錯綜していて、その裏にはもつと深く濃い混沌が横たわっていたのだ。

人身売買が根絶されない理由の一つとして、インドネシア政府の中枢に、その犯罪組織を手引する者がいる可能性が昔から示唆されていた。この世界の闇は海の底よりも昏い。

1—4. 夕食時

辺りは既に暗くなっている。

「……やっぱりブラック鎮守府だったのであります…」

と、畳の上にあきつ丸が脱力して臥せていた。この南洋での一日に、彼女の全身の関節や筋肉は悲鳴を上げていた。明石があきつ丸の制服を脱がして、背中に湿布を貼ってやっている。流石に運動不足じゃない？ と明石は呆れてみせる。

「こんなハードワーク、呉でもしなかった…」

海上哨戒中に人身売買の現場に遭遇し事件を解決した泊地の艦隊だったが、その後すぐについ数カ月前に起こった震災の復興支援の仕事が待っていた。というのもこの頃のリング泊地での業務は、支援活動が主となっている。震災のために、泊地の活動は非常事態モードに切り替わっていた。

そのため艦隊は、午前中は通常業務としての軽い海上哨戒、午後は近隣の村に赴いて、艦娘としてできる限りの支援を行う。その支援内容は多種多様で、艦娘の人並み外れた体力を利用しての、倒壊した建物の瓦礫の処理や修復、物資や食料の海上輸送、仮設住宅の建設などの力仕事から、ベビーシッターや被災地住民の喧嘩の仲裁、少年犯罪の取

り締めまりまで、とにかく何でも東奔西走。正直に言つて、人手が全く足りていない。あきつ丸は、とんでもないところに送り込まれてしまったとすぐに気付いた。

「これが毎日続くのでありますかあ…」

口から簡単に愚痴がこぼれてしまうのは、この泊地の雰囲気やけにアットホームだからだろうか。「リング泊地」と達筆で書かれた立て看板と共に村の外れに居を構えるポロ屋が、艦娘たちの根拠地となる家だった。玄関からはそのまま土間に繋がっており、土間には調理場や数人が同時に使える広めのシャワー室へ繋がる通路がある。シャワー室の裏手には温泉が張つてあつて、使用するには一度家の外を回らなければならぬ。シャワー室の中から窓を通してシャワーを引つ張つてくる妙な作りになっているのはご愛嬌である。

土間の奥は三和土になっていて、その先には十一畳程度の畳の間が広がる。そこは皆が集まる食事場所として利用されている。その右と奥にまた襖を隔てて十一畳の部屋。右方を提督の執務室、奥を艦娘が寝泊まりする場所としている。これが、この泊地の全てである。

「嫌になつた?」

げんなりしているあきつ丸に明石が聞く。

「まだちよつと、この泊地に馴染めてないみたいであります」

「平氣平氣。慣れつて恐いよ？ 数週間暮らしたら元氣に仕事してるから、頑張つて！」

明石がぼちつと湿布を貼る。ほんとかなあ、と首を傾げるあきつ丸。

明石が救急箱を片付けていると、執務室の戸を開けて、中からパジャマ姿の夕立が現われる。

「あれー？ あきつちゃん元氣ないっぽいー？」

夕立はあきつ丸に近寄つて、その太腿を指で突く。

「痛あ！ ちよ、やめるであります！」

ビクツと反応して身じろぐのに、夕立は喜ぶ。

「面白い動きー！ えいえいえい！」

「痛い痛いー！」

おもちゃを見つけてしまった、と夕立の眼の色が変わる。両指をわきわきと動かし、口端がたまらず上がつてゆく。

「おつ、おかしい、耐拷問訓練は20時間は積んできたのに！ このくらい！ ああああ

ああ！」

「耐拷問つて…、あきつちゃんどこ出身？」

二人のじやれつきをみて呆れる明石。そのときがらつと勢いよく音を立て、玄関の戸が開いた。

「たらいまー。ったく、おっさんたちの話は長くて困るねえ。あつちい風呂を浴びて酔いを覚ましてえや」

赤ら顔の涼風の帰還である。彼女が語るには、先ほどまで地元の漁師の手伝いをしていたらしい。気風のよさがえらく先方に気に入られ、酒を勧められてなかなか帰れなかったとか。

「おつ、あきつつあん、昨日の今日なのにもううちの雰囲気にも馴染んじまったのかい、感心感心。最近の若い奴は神経質なのが多くていけねえや」

涼風は年季の入った江戸っ子節を回す。それからとりあえずシャワー室へ消えた。その後、伊58と呂500が帰ってくる。瀬戸提督の娘である雨見も一緒にいる。三人とも髪が濡れている。二人の潜水艦はここから少し距離のある小学校まで雨見を迎えに行つて、その帰りに海で少し遊んで来たらしい。

「二人がいたら海に行けるから、嬉しい」

と、雨見がぼそりと言う。深海棲艦のために、大抵の海岸は遊泳禁止になっている。

「今日は特別だからね、雨見。一人で行つたらダメでち」

「みんなばかり海で泳げてズルいよ。ろーちゃんだったらまた連れて行つてくれる？」

「うん。一緒に泳ぐんですって！」

二つ返事で呂500は答える。伊58は彼女を訝しげに見た。

「……Uボート一人じゃ不安でち！ 雨見、その時はちゃんとゴーヤを呼んでね？」

「でつち、ろーちゃんそんなに信用無いつて？ それにUボートじゃなくて今はろーちゃんですつてー」

そんな会話を交わしながら、三人ともシャワー室へ。伊58を上姉とする三姉妹のようだ。

「みなさーん、ご飯が出来ましたよー」

土間の方から五月雨の音がする。彼女が料理を運んで現れた。

「今日はロールキャベツです！ 昨日は食後にあきつ丸さんが体調を崩されていたので、今日は日本的なものにしてみましたどうかと提督に言われまして、優しい家庭の味にしてみました！」

「いや……ほんと申し訳ない」

若草色の大玉キャベツの上にトマトソースがたっぷり染みている。座っているだけで唾液が溢れてきた。

ただひとつ、提督の気遣いというのが意外だ。

「飯か。腹が減ったな」

執務室の襖を開けて姿を見せたのは瀬戸提督。先程まで物音すら聞こえなかったた

めにあきつ丸は面食らった。

「居たのでありますか」

「そりゃ居るだろ。執務室だぞ」

釈然としないあきつ丸。

「ほお、夕立と遊んでいるのか」

「あきつちゃんが面白いっぽいー」

夕立はまだあきつ丸の背に跨っていた。

「遊んでいるというか遊ばれているというか……」

ひよつとしてこれは新人いびりかもしれない、そうあきつ丸が思い始めていた頃、花柄のパジャマを着た雨見がシャワー室から出てくる。

「ただいま帰りました、お父さん」

「おう、お帰り。皆で飯にしようか」

「うん！」

時間差で他の艦娘も揃う。ちやぶ台の上に料理が置かれて、全員で囲む。ロールキャベツに白米にお味噌汁。近くで獲れた魚の煮付け。漬物。異国が少し混じったようなところがまったく日本食らしい。

この泊地のルールはたった一つ。食事は全員揃って食べることに。それを守るために、

艦隊は何がなんでもこの場所に帰ってこなければならぬ。危険な仕事を全員欠けることなく生き抜くこと。そこにはそのような意味が込められているようで、良いルールだなとあきつ丸は思う。

箸でロールキャベツを割ると、中からハンバーグの肉汁が溢れだす。口に運ぶと、味がよく染みている。五月雨の料理の腕は確かなようだ。彼女はエプロン姿で、姿勢よく正座し、静かに食事をとっている。座っているだけで華になる、良く出来た若い奥さんのようだ。

「昔は、ドジばかりだったけどなー」

あきつ丸がそのことを話題にすると、涼風が茶化した。以前はそそっかしく、食器をよく割っていたし、他の家事も碌にできなかつたという。

「特訓の成果ですつ。別に、前もそんなに割ってなかつたですし……」

明石が魚の煮付けに手を伸ばしながら言う。

「五月雨、エプロンの表裏ひっくり返ってるよ」

「ええつ、うそー!」

ぼん、と五月雨の頭に手が置かれた。

「うそそうぞ。よくやってるよ五月雨は」

「もおー、からかわないでください明石さん!」

ああ可愛いなあ嫁にしたい、などと明石は言う。

その会話に皆が笑つて、提督も口端に笑みを浮かべていた。

提督の隣で雨見も笑つている。

あきつ丸はつい思索していた。当然のことだが、彼女は、提督と五月雨との間に出来た子では無いだろう。五月雨自身が言つていたが、家事の技術はここ数年のうちに訓練して身に付けたのだという。それは、そうする必要があつたから。それは雨見に関係していることだろうか。どうして艦娘ではない雨見がこの泊地にいるのだろう。五月雨が公私共に提督を支えているのは何故か。

一つの問がごく自然に弾き出された。

提督の夫人は今どこで何をしているのだろう。

とはいえそんなことを疑問に思つても、あきつ丸は聞かない。それがこの場の雰囲気壊す発言であることはあきつ丸でもよく分かる。呉で散々空気が読めない艦だと評されてきた自分も、成長したものだと思う。人間には色々な事情があるものだ。他人を悲しませるような詮索はしない。それが、あきつ丸が自分の人生から学んだ一つの教訓だった。

そうしてそろそろ自分も会話に混じつてやろうと、あきつ丸は冗談を一つ飛ばす。

「これはケツコンカツコカリをするなら五月雨殿でありますな、提督殿！」

全席が凍り付く。会話が途切れ、雨見の顔色が曇り、瀬戸の手が止まった。それは不味いと、艦娘六組の目が訴えていた。

「やっべえ、地雷踏んだ」

流石のあきつ丸も語尾が素になった。

2—1. 夜

食事の雰囲気は呂500が場をとりなしてくれただお陰でなんとか回復した。

「そういえば今日は海岸で何か拾ったんですって、雨見？」と言うと、雨見はポケットから綺麗な藤色の貝殻を取り出して見せる。

普段は行かない浜の方に落ちていたの、と雨見が呟く。それを見て、確かにこつち側の浜では見ない色をしていますね、と五月雨が言い、ただ流されてきただけか、それとも環境に違いでもあるのかしら、などと明石が学術的な考察を始める。周りが関心を持つてくれたのが嬉しかったのか、雨見の表情は段々と明るくなっていった、あきつ丸は一息をついた。

その後の食事はまた雑談で過ぎていった。

温泉から一足先に上がり寝間着に着替えたあきつ丸は、艦娘寮と称された、十一畳の部屋に自分の布団を敷いて潜り込んでいた。その部屋を包むように、今は見ない蚊帳が張つてある。その裾を潜るようにして、他の艦娘も雨見もやってきた。雨見と夕立や呂500たちが遊んでいる隣であきつ丸はしばらく泊地の活動日誌を読んでいたが、消灯時刻ということで電気が落とされてしまう。別に異論は無い。郷に入れば郷に従うだ

けである。文句は腹の中に仕舞っておくが。そう思つて、あきつ丸はしばらくの間、暗闇の中にいた。

虫の声。湿つた夜の空気に、他人の眠つてゐる息使いが微かに聞こえている。日中はじつとりと暑かつたが、夜は風が入ればそれなりに涼しい。あきつ丸は目を閉じて木々のざわめく音を聞こうとした。じつと耳を澄ませていけば聞こえる気がした。しかし、思つたようにはいかない。波の寄せる音は聞こえてくる気がする。泊地は村の中でも海岸に近い。

あきつ丸は足音を立てないようにこつそりと部屋を抜け出し、玄関から外に出た。鎮守府の外の景色は完全に闇の中に溶け込んでいる。少しだけ目が慣れてくると、景色の輪郭が、人の息づく村々が見えてきた。

闇の中に、ぼおつと明るい塊が浮かんでいる。ゆらゆらと揺れるそれが近づいてくると、電灯を持った瀬戸提督であることが分かる。瀬戸はあきつ丸の姿を認めると、怪訝そうにした。

「なんだ、トイレか。あんまり一人で出歩くなよ。艦娘とはいえ夜は安全じゃないからな」

「いや、トイレでは無いのであります」

「じゃあなんだ、本国が恋しくなつたか？」

電灯の光が暗闇からあきつ丸を浮かび上がらせている。

「別に、ちよつと歩こうと思っただけで……」

瀬戸はあきつ丸の顔を覗きこんだ。その眼の奥に言いたいことがあるのを見たのか、不思議そうにして言う。

「そこに座つて話すか」

あきつ丸はその言葉に無言で従つた。

木組みの長椅子に腰掛けて、黒い艦娘は夜空を見上げる。遮蔽物の無いところで見上げる空はどこまでも広い。裏側から月明かりに照らされた雲は何か別の生き物のように見える、心がその中に落下していきそうだった。詩人精神があつたなら詩の一つでも詠んでしまいそうだ。

「綺麗でありますなあ」

あきつ丸はぼそりと呟く。

「そうだな。ここの星はよく見える」

「そこだけはこの泊地を認めるであります」

「他は不満ばかりか？ まあ流石に、ここが快適な職場であるとは口が裂けても言えんがな」

瀬戸は自嘲気味に言う。不満があるのならなるべく改善しよう、と付け加える。

「いや…、始めの頃は文句ばかり言つて本当に申し訳なかった。今思えば恥ずかしい限り。自分はこれからこの泊地の良い所を一つずつ見つけていくことにしたのであります」

あきつ丸がこの場所で生活することになるのはもう変わらない。彼女としてはこの数日の間に気持ちを入れ替えたつもりだった。

「構わない。文句だつて何だつて言えればいい。うちに来たからには娘みたいなもんだ」

瀬戸は言う。

「それ…最大級のセクハラだつて自覚しててありませんか？」

「懲戒免職は覚悟している」

「そんな覚悟いららないであります」

どうやら冗談の一つや二つは飛ばせる提督のようである。結局艦隊の雰囲気というのは提督の気質に左右される。泊地における家庭的な雰囲気は、この男が容認しているからこそだろう。

「提督殿、一つ聞いていいでしょうか」

「ああ。雨見のことか？」

「…その通りであります」

言う前に質問の内容を当てられる。瀬戸も今日の夕食の様子を気にしていたのかも

しれない。雨見の禁句。母親について。

「先に言っておくべきだったかもしれないな。雨見の母、つまり俺の妻である瀬戸岬は、あいつを産んだ後に死んだのだ。その後は家を引き払って雨見をここで生活させている。何しろ繁忙期は一人でいさせることになっちまうからな」

雨見を泊地で生活させる提案は、五月雨がしたものらしい。家で一人になっている幼い雨見を見かねて、自分が岬のように彼女の面倒を見ることを条件に、提督に頼んだのだ。他の艦娘が承諾するか分からなかった提督だったが、いざ生活を始めて見ると、誰もが雨見と家族のように接してくれた。

瀬戸が最も懸念していたのは、艦娘はある日突然戦没することがあることだ。もし家族の一人がまたいなくなってしまうえば、雨見の心に深い傷を残すだろう。そのために、必ず泊地に生きて戻ってくるようなルールを定めた。結果的に、艦隊の結束が強まったようだった。

「なるほど、そうだったのでありますか」

つまりは、雨見の母親の話題は、皆出さないようにしているということ。同時に、泊地の雰囲気がどのように作られていたのかも、あきつ丸は知っていく。

「ところで、俺の方も二つほど聞いていいか？」

瀬戸とは大分打ち解けた気がしてきた。

「なんでありますか?」と応えるあきつ丸。

「運動不足と聞いたが…、お前どうしてうちに来た? 筋肉痛を訴える艦娘を俺は初めて見た」

見苦しいところを、襖一枚隔てて聞かれていたようだ。

「し、仕方ないのであります。自分は戦闘向きではないので、呉ではベンチを温める役も任せてもらえなかつたといひましようか」

あきつ丸は必死に弁解してみせる。瀬戸は、笑わなかつた。

「ここは戦闘が激しい場所ではないが前線だ。戦えない艦娘を寄越す必要はないだろう。それでもお前はうちに来た。一体何の任務を受けている?」

瀬戸はあきつ丸を見据える。

「お前、ただの揚陸艦じゃないだろう」

「はて、何のことやら。」

あきつ丸は薄く笑つた。疑われることには、慣れていた。やはり、始めはこうであるべきだと彼女は思った。陸軍出身という経歴を持つて生まれた時から、疑われなかつた日はない。家族と呼ばれ信頼されるより、居心地がいい。

「自分は大本営の采配でここに飛ばされてきただけでありませよ。偉い人間の考えることは、自分にはあずかり知らないところだ」

「ただ俺は、お前を信用できるかを見極めたいだけだ」

「娘と言ったのは、あれは嘘だったでありますか」

冗談めかして言われて、提督は少し押し黙る。それから二つ目の質問を投げかけた。

「今日の午前に、人売りの現場に遭遇したと聞いた。そのことでお前の意見を聞きたい」
何故自分に、とあきつ丸は尋ねようとしたが、提督はその質問を全員に聞いているのかもしれない。現場に遭遇した艦娘全員に。だとしたら、提督が聞きたい要旨は次のようであると予想した。

「艦娘が、深海棲艦ではなく、人間を相手にしたことについてでありますか」

「お前はそこを問題だと思うか」

提督は表情を変えず、じつとあきつ丸の眼を見ていた。本当に、本心からの意見を聞くようとしているのかもしれない、と感じとって、正直に言う。

「いえ……、自分個人として感じたのは、この地ではこれが普通なのかもしれない、という愕然でありました。貧困にあえぐ子供たちがいて、人攫いがある。天災によつて身寄りの無い者たちは、格好の標的となるでしょう。必然的にこの世界で起こっている非人道的所業、その一端を垣間見て、動揺しなかつたといったら嘘になります。しかし、そうして動揺している中で、艦娘として自分に来ることはないか、ごく自然にそれを考えておりました。あるならば今すぐそれをやろうと、そう思つたのでありますよ」

それからあきつ丸は身を粉にして働いた。あれほど大変な仕事になるとは思っていなかったが。

「そうか。流石だな…」

提督は呟いた。

「自分がお前くらい歳の年齢の時だったら、耐えられたかと思つてな。艦娘から見守るべき人間が、互いを食い物にしあつてるんだ。それを目の当たりにしても迷わないというのは、もう立派な軍人だと俺は思う。明石や涼風あたりにも聞いたんだが、あいつらも同じことを言つたよ。艦娘は、皆そうなのか？ 一介の軍人よりも強靱な精神を持つているのか」

「まあ、艦娘は軍人ではなく軍属でありますからな」

あきつ丸が笑えない冗句を飛ばした。ところがそれは真実を突いていた。だから迷う必要もないというのがひとつ。

「それに、あんまり艦娘の外見で年齢を判断しない方がいいでありますよ。身体改造自由自在でありますからな、自分たちは」

「まさか、艦娘に年齢を聞くと竣工年を答えるというのは」

「それは都市伝説であります！」

実は戦前生まれだとしたら、会話が成り立っているのが恐ろしすぎるだろう。

夜も更けてきた。虫の声が、静寂の中に滲んでいる。

「明日も早い。そろそろ中に戻ろうか」

「…そうでありますな。今夜は色々と考えが聞けて良かった。提督が守ろうとしているもの、守れたらいいでありますな」

「俺が守ろうとしているもの…?」

瀬戸は振り返ってはたと止まる。

「あれ。守りたいのは皆の笑顔だとか、てつきり提督ならそんなことを言うのだと思っ
ていましたか」

「いや…そんなこと、考えたことも無かったと思つてな」

瀬戸が苦々しげに笑った。

「ああきつと、皆そんなものでありましょう。お休みなさいであります」

あきつ丸は微笑する。ああ、おやすみ。と、瀬戸も部屋に消える。

あきつ丸は、再び暗闇の中で考えた。そろそろ自分も与えられた仕事を始めよう、と。

2—2. ろーでち

波打ち際を、伊58と呂500が歩いていった。その隣を、あきつ丸が付いて行っている。潜水艦二人の素足が冷たく濡れていた。

三人は、ある探しものをしていった。銀時計である。村の災害避難所にて、アリという名の少年に頼まれたのだ。アリは雨見と同じくらいの年齢で、災害によつて両親を亡くしている。ムジという犬が、残された唯一の家族だった。肌身離さず持っていた筈の父親の形見の時計が失くなっていくことに気付いたのは、今日の昼過ぎ。その日の午前には、アリは一人でムジと遊んでいたのだという。ところが午後になってムジの行方が知れない。同時に腕時計も見つからない。恐らく時計を啜えたままどこかに行ってしまったのだろう、という推察であった。

というわけで三人はまず、その犬を見つけようとしていた。住民に聞きこみをしたところ、つい先ほど、この海岸付近で目撃されたそうだ。その時に犬が時計を啜っていたという目撃情報も得ており、まず先に犬を見つけるといふ作戦行動で三人の方針はままとまっていた。ちなみに犬種はキンタマーニ・ドッグ。インドネシア原産の中型犬である。

「ねえでっちー。リングガ泊地のリングガって、どういう意味なんですって?」
「……」

冷たい波を足で切る呂500に、伊58は不機嫌そうにして答えない。

「でっちー?」

「うるさいなあ。どうして今聞くんでち」

「ひよつとして機嫌悪い?」

呂500はきよとんと首を傾げている。伊58は彼女の相手をしたくないようだ。

「……あきつ丸に聞いてください」

自分でありませるか、とあきつ丸。呂500を手招きして、耳元でリングガの意味を教え
てやる。それを聞いて、彼女が驚いたように手を口にやった。

「ええー! でっち、えっちー!」

「何ででち!」

リングガはサンスクリットで男性器を意味していた。

依然黙々と歩き続ける伊58にかまって欲しいのか、呂500は「ところででっち」と
話しかける。

「ろーちゃんが昨日と変わったことに気付いた?」

呂500は嬉しそうにしている。伊58は彼女の方を見ないでぼそつと言う。

「……髪飾りが今日はでいごでち」

その通りに、髪には普段のツツジの飾りではなく真つ赤なでいごの花が差してあつた。照れたように、呂500は自分の飾りを触る。

「えへへ、正解ですつて。ろーちゃん似合つてる?」

「はいはい、似合つてるでち」

「でつちも今度おそろいにしよ?」

つれない態度の伊58だったが、呂500は無邪気に彼女の腕に抱きつく。伊58はぼそつと言つた。

「ゴーヤには似合わないよ」

「そんなことない、可愛いですつてきつと。はい!」

「はあ、仕方ないなあ」

呂500のキラキラした瞳を覗き込んで、伊58は観念したように呟いた。

あきつ丸はそんな二人の隣で歩いている。

「あの一、お熱いところ申し訳ない。やっぱこの辺にはいないようであります。観測機には反応ナシ」

あきつ丸は犬探しの為に、観測機を飛ばしていた。そのうち一機が彼女の元に戻り、広げた巻物の白紙部分にインクが滲んでいくように吸い込まれていく。そうして、そこ

に欠けていた航空機の文様の一部となる。観測機は真つ黒な影のような物質で構成されておられ、あきつ丸が手元に持つている幻燈機が巻物に映し出す影から生み出されていた。

「前回の時も疑問だったけど、それ…一体どうなっているんでち」

「ナイショであります」

あきつ丸が微笑んだ。ちなみに、巻物もあきつ丸の背後を囲むように浮いているように見える。何かワイヤー状のもので吊るしていると考えられるが、全く奇術にしか見えない。今は丸めて仕舞い込んでいる。

「ところで、お二人はどれくらい仲なのですか。随分と長い間柄のように見えますが」

あきつ丸が二人に聞いた。伊58と呂500はお互いに見つめ合う。

「あ…実はそんなに長くはないんです。大体三年くらいかなあ。呂500がU-511としてうちに来たのがそのくらいで」

「三年は、十分長いでありますよゴージャ殿」

「付き合いだったら五月雨や明石の方が長いでち。変に懐かれちゃって」
「懐くってー。でつちひどいなあ」

呂500が少し拗ねる。

「要するにこいつがまだ新米の時にゴーヤが面倒を見ていたんでち」

「でっち、愛してる」

「はいはい」

伊58は歩きながら、ぽつりと呟いた。

「泊地は平和でち」

「ゴーヤ殿？」

「今はこんなに平和だけど、いや今も平和とは言えないけれど、でも昔よりは随分よくなったでち。あの頃は酷かったなあ」

「でっち、それろーちゃんが来る前の話？」

「うん」

「でっち、苦しいなら無理に思い出さなくてもいいんだよ」

「ありがとう」

「でっちはろーちゃんの一番大事な友だちなんですって。親友つて言うの、提督に教えてもらいましたって」

でも今ならばはつきりと分かる。この性格こそが、彼女が元々持っていた気質だった

のだ。つまり呂500は、人見知り気質の、底抜けに明るい少女だったのである。性格とは分らないものだ、伊58は心底思う。そして、呂500のことをちゃんと知れて良かった。

自分も、先輩面がしたかっただけなんだろう。思い返してみればあの頃の自分は人の面倒を見ることで救われていたところがある。あの頃の自分たちは皆そうだった。五月雨も。明石も。

それでいうと目の前の黒い艦娘は、呂500と真逆のように伊58には見えた。表面上は明るく、腹の底では何を思っているのか分からない。彼女には、人知れず苦しみを抱えているような、あるいは苦しみを求めているような、そういう言い知れない孤独を感じる。苦労人とはまた違う孤独者特有の。

「あきつ丸は寂しくなかった？」

ふと、呂500が聞いた。

「自分でありますか？」

「うん。ここに来たときは一人だったって。ろーちゃんも同じだったから、気持ち分かるよ」

「そうでありますなあ」

あきつ丸はほかんとした。それからふふつと笑う。

「自分はずっと一人でしたから、慣れてしまつてあんまり感じないのでありますよ。それよりも泊地の家族的な雰囲気には驚きました。自分は馴染めていゝかなあ」

「ぼつちりですつて。あきつ丸はもうろーちゃんたちの仲間だよ。今はどう？ 寂しい？」

「いえ。愉快で実にはいい気分であります」

嘘つき。伊58はそう思った。暗闇の底で寂しそうにしているあきつ丸の相貌が見えた。

飛ばしていた観測機に反応があつたようだ。歩いているとすぐに、伊58たちにもその姿が見えてきた。

それは両耳をパタパタと海風に揺らせて遊んでいる犬、によく似た髪型の艦娘夕立だった。浜に打ち上げられたフナムシを、木の枝で突いている。

「夕立殿ー、この辺で黒い中型犬を見ませんでしたかー？」

あきつ丸の呼びかけに顔も上げず、夕立の頬はぷくつと膨らんでいた。いじけたように、フナムシを転がしている。何だか物凄く、機嫌が悪く見えた。

「黒い中型犬…が何つぽい？」

「…を探しているのであります」

恨めしそうに眉を曲げ、夕立の頬が膨らむ。

「知らない」

フナムシがひっくり返された。

「夕立殿はここで遊んでいるのでありますか？」

「遊んでるわけじゃないっばい」

「どう見ても遊んでいるようにしか見えないのでありますが……」

その言葉が彼女の機嫌を更に損ねたらしい。夕立の頬は限界まで膨らむ。それから喋ろうとしてぶすーっと空気が抜ける。

「いいのかな。私を怒らせると、犬のことなんて教えてあげないんだから」

「知っているのでありますか、ムジのこと」

ぶくっーん。夕立は拗ねて顔を背けた。その様子はどうやら知っているらしい。

「ムジ、あの犬、ムジって言うのね。まあとりあえず、あきつ丸には謝ってほしいかな」

「ごめんであります。よく分からないけど」

「早いでち、謝るの」

呂500はフナムシが藻掻いているのを好奇心旺盛に眺めていた。

「あっち」

と、夕立は村の方を指差す。

「でも行く必要はないっばい。あきつ丸たちが探してるのって、銀色の腕時計でしょ。」

犬が啞えていたやつ。提督も付いて行ったからたぶんもう持ち主に返されてると思うけど」

「提督……？ なぜそこに提督が出てくるのでありますか」

「知らない。散歩でもしてたんじゃない？」

「どうやら「提督」と「犬」がNGワードらしい。絶対に言わないようにしよう、と伊58は納得。そうでないとなかなか話が前に進まない。ところが、なるほど、とあきつ丸は手を叩いた。

「夕立殿は提督と犬がそんなに嫌いなのでありま——」

「わあああ！ ゆ、夕立？ 結局のところなんでそんなに怒ってるんがち？」

あきつ丸の口を塞いで、強引に言葉を被せた伊58の内心に、ひよつとしてあきつ丸って空気が読めないんじゃないかと疑念が募ったが、夕立はぶちぶちと心情を吐露し始めた。

「聞いてくれる？ 提督ってほんとありえないんだから！」

それから主観的で要点的得ない夕立の説明を三人は聞いていたが、それを一言でまとめると、提督に不当に怒られたのが納得いかない、ということだった。状況は、次の通りである。

夕立は、数十分前に、黒い中型犬をこの浜で発見した。その口には銀の腕時計が啞え

られていて、夕立はすぐさまそれを盗品だと判断。すかさずその中型犬を捕まえようとするも、突然襲いかかってきた艦娘に犬は激しい抵抗を見せる。引つかかれたり噛まれたりと暴風のように暴れるので、夕立も噛み返したり組み伏せたりと犬と同じ次元上で応戦。そうしてようやく中型犬にヘッドロックが決まったところで、提督に見つかったのだという。

瀬戸提督は夕立が犬を苛めていると判断し、きつく叱った。生き物の大切さを説き、お前の押さえの効かないようなところが心配なのだといつものように説くも、夕立は自分の言葉が信用されなかったショックでその内容も右から左だった。その間に犬が腕時計を啜えているのを見て、提督は犬を飼い主のところまで戻すことを思いつく。だから提督は犬を連れて、村の方へと向かったのである。

「だからね、もう大丈夫っぽい。時計も、持ち主のところに戻ったから」

夕立はそう言って、事を仕舞おうとする。ところが、それは誤りである。三人は顔を見合わせる。

「それだと困る！ その犬の飼い主は、時計の持ち主ではないのであります！」

「急ごう、でつち、あきつ丸！」

三人はきよんとする夕立を置いて村の方へと駆け出した。

送電線が木々の葉の間を縫うように伸びてくると、村の集落が見え始める。背の低い

家屋が建ち並ぶ道で、運搬機を押す少年がその汗を拭った。あきつ丸たち三人が村へ向かい始めた同時刻、ある家の庭の中に、瀬戸提督と見知らぬ男の姿があった。隣で黒い中型犬、ムジが舌を垂らして尻尾を振っている。

「わざわざすみませんねえ、時計が見つからなくて困っていたんでさあ。助かりましたよ旦那。どうやってお詫びをしたらいいか」

男が言う。提督は頭を振った。

「通りがけに見かけたただけだ。礼には及ばない」

「相変わらず朴訥な人だなあ。どうですかこれから一杯でも」

盃を傾ける仕草をする男に、にやりと笑う提督。

「ふむ、それも悪くないな」

「おっと、分かる男じゃねえですか旦那！」

この男は、快活に笑っていた。提督から受け取った腕時計をポケットに忍ばせ、家中に入っただけでいる。それなりに富裕な身なのだろう。土地を持ち、震災に対して家も健在で、広い庭に犬を放っている。犬を脱走させないための庭を囲む有刺鉄線は、手に入れたものを誰にも触らせないようにする男の性質が表れているように見えた。ただ、それでも犬はどこかに生じる綻びを見つけたでは逃げていくらしい。晴天から吹きつける熱風に庭の雑草が戦いで、ムジが欠伸を一つする。

「ところでその腕時計、貴様の腕にはめるには小さすぎる調整のようだ」
男は歩みを止めた。

「わざわざポケットから取り出して使うのか？」

あきつ丸たち三人がその家の前に到着すると、黒いランニングシャツに海軍の白袴という、いつもの出で立ちの提督と鉢合わせた。

「お前ら、どうしたそんなに息を切らせて」

「て、提督殿、腕時計は……」

説明もなしにあきつ丸が聞く。瀬戸の手には銀の腕時計が握られていた。

「ああ、こいつを探しに来たのか。慌てて来たってことはこの時計の本当の持ち主を知っているってことでいいか？」

「話が早くてありがたい……。何か手違いがあったらどうしようかと」

「そうか、やっぱりか」

提督？ と呂500が首を傾げる。瀬戸は時計を盗まれるのではないかという懸念を持って三人が駆けて来たことを悟つたらしい。

「いやな、初めはこの家の者に盗られそうになったのだ。まあ、少し問い詰めたら返してくれたのだが」

何事も無かったかのように瀬戸は言う。

「よくその適当さで返してもらえたでありますな……この時計、カルティエの機械式では……」

「日本円で四十万は下らないものだ。俺も欲しい」

「盗っちゃダメでありますよ」

瀬戸は三人に時計を渡す。アリという少年のものだとあきつ丸が教えると、驚いていた。

「それは危ないな。うちで預かれたらいいのだが。聞いたところ、その少年は避難所に暮らしているのだろう」

「ムジだけじゃなくて、アリ君も引き取ってあげたら良かったんですって」

呂500はムジの首筋を撫でていた。そうしていると、ここの家の者への文句が零れたのだろう。

「だから、たった今時計を盗られそうになったばかりだったんでち。そんな奴があの子を育てられる筈がないよ」

当然だとばかりに伊58が言う。瀬戸は少しだけ口元を緩ませた。

「あれは典型的な小悪党だ。まあ、そんなに悪い奴じゃないさ」

そうして、瀬戸は泊地に向かって帰っていった。散歩の途中だったのだ、と言って。あきつ丸はその背中を見ながらぼつりと呟いた。

「初めて会った時は釣りをしていたが、提督って案外とサボり常習犯なのでありますか」
「あれも十分小悪党でち」

三人は呆れたように提督を見送った。

薄暗い家の中に掛け時計の音だけが響いている。台所の蛇口から水滴が垂れかかり、手前の机の上には食器が煩雑に散らかっている。部屋の片隅で、男が一人膝を抱えて震えていた。

男は苦笑いを浮かべている。

あのまま泊地の提督にしらを切り通して時計を返さなかったら、彼は自分の悪事を見過ごしただろうか。恐らく、分かった上で見過ごしただろう。その代わりに、もつと大きな疑いを自分に掛けた筈だ。

この頃多い子供の失踪事件の犯人を、泊地の提督は追っていると聞く。

あの眼は、一人の人間を押し量る眼だった。取るに足りない悪党なのか、この世から滅却せるべき悪党なのか。自分という人間の底を、ひと目で見透かされたようで、男は笑うほかない。

「あいつ、なんて眼をしやがる……」

溜息をつく。それから、心を入れ替えて、男は少しだけ真面目に生きようと思った。

2—3. 熱病の雨見／保健室の明石

子供の失踪は依然続いている。失踪届のほとんど出ないのは、消えているのが身寄りのない子供ばかりであるからで、難民ビジネスが関与しているのは明らかだった。アジア諸各国はそれを緊急の事案だとして、泊地に問題解決の協力を依頼している。深海棲艦の影響下で海上を監視できるのは、艦娘において他はなかった。

ところが泊地の人員不足は知れている。瀬戸はこの案件は数年単位では解決しないだろうと考えていた。救える命は救いたいのが、近隣の村の復興支援も疎かにはできない。これからのことに頭を悩ませながらふと窓の外を見ると、雨脚が強くなっていた。

瀬戸が仕事をしているすぐ背後では、雨見が布団の上で息苦しそうに眠っている。五月雨がその隣で、雨見の額の手ぬぐいを新しいものに取り替えていた。雨見は高熱を出していた。五月雨は彼女の看病を付きつきりできていた。

雨見は数日前から体調を崩している。医者は栄養失調だと診断し、ビタミン剤を処方し十分な休養を取るように言ったが、雨見は日を追うごとに衰弱していた。遂には熱を出し、床に臥せてしまった。瀬戸は雨見の喘ぐ呼吸の音を聞いていた。

「雨見ちゃん？」 五月雨が気付く。

「お父さん」

雨見は薄く眼を開いていて、うわ言のように呟いた。瀬戸は座卓の電灯を消し、どうした、と雨见到穩やかに語りかける。

「真つ暗な穴からね、声がするの」

雨見は息苦しく喘いでいた。喘ぎながら、自分を追いかけてくるものから逃げるように、言葉を継いだ。

「浜辺で遊んでいたらね、岩の後ろにね、真つ暗な穴があつたの。その奥から誰かが雨見を呼んでるの。優しい女の人の声で、おいで、おいで、つて。でも物凄く怖い。真つ暗で。ひゆうひゆうつて洞窟から音がして。海の音が凄く大きくて耳に響いて」

そこまで言うと、雨見はわあわあと泣き出した。飛び起きて、瀬戸の腕の中に抱きつく。五月雨は驚いていたが、雨見は怯え震えて、瀬戸を強く掴んでいる。

「怖い夢を見たんだよ」

瀬戸は雨見の背を擦っている。

「お父さん、私死ぬの？」

「死ぬもんか」

雨がトタン屋根を打つ。雨見はしゃくりあげながらも、段々落ち着いてきたようだ。

「おかゆ、食べられそうか？」

「うん」

泊地の離れは、工廠として利用されている。外観は母屋とあまり変わらないが、中のほとんどは工作艦明石の私物と化しており、旋盤や加工機などの工作機が所狭しと並ぶ町工場のような部屋と、各種薬品が揃えられ、常時皮膚の培養や遺伝子実験が行われている通称「保健室」に分かれていた。何故そう呼ばれているかというところ、薬品棚や実験装置を部屋の真ん中を仕切るカーテンで隠してしまえば、まるで日本の学校の保健室みたいな内装だからである。明石が白衣を着てそこにいる時なら、艦娘の悩み相談も受け付けているという。

「で、今日は何の用かな」

明石が落ち着いた様子でコーヒーを一杯口に含んで尋ねた。パイプベッドの上にはあきつ丸と涼風が腰掛けている。

「あー話というほどでも無いのですが、日誌のバックナンバーを読みたいなあ。提督殿は忙しそうなのでこっちに来たのであります」

「あたいはただの付き添いー」

涼風が元氣よく手を上げた。

なるほど、と明石は頷く。

「あきつちゃんは真面目だねー。とりあえず、コーヒーでもどうぞ」

「ありがとうございます」

あきつ丸は両手でマグを持って一息つく。

「ところで明石殿は何者なのでありますか。修理工？ 遺伝子工学者？ 確か海上では、救急箱を持っていたような」

「元はアイテム屋さんだったりして」

「うーむ不思議だ…」

はぐらかされたような気分していると、「日誌のことだけどね」と明石が言う。

「五年前のより後ろのは無いんだ。ごめんね」

「……ゴージャ殿が当時の惨状を少しだけ口にしていたのでありますが、そのことと関係が？」

「うん」

くつろいでいた涼風も、話に参加する。

「五年前つていやああたいが着艦した頃かい。ああ、確かにあれは酷かった。あたいが来たのは作戦の後だったから、何て声を掛けたいかもしらんかったし。でもその頃も、提督は日誌を付けていただろ？」

「うーん、当時の記録は夕立が全部破いちやっただよね。データは全部本国に送ってあるから見れないことは無いんだけど、詳細は日誌の方だから」

「あーそういうやそうだったか……」

言つてから、涼風は深く頭を下げていた。

「あの時は、何も出来なくてごめんなさい」

「もう……、いいんだつてば。本当に、涼風が来てくれて私たちは救われてたんだよ？」

泊地を立て直せたのも、涼風がいなかったら無理だった」

明石は笑いかける。顔を上げた涼風の眼は赤く滲んでいた。

「だつて、あたいは、何も出来なかつたんだ……だから、ただ自分の仕事をするしかなくて……あたいの、いつも通りにするしかなくて……」

「それにどれだけ助けられてたか。皆涼風を見て、自分たちもいつもみたいに、仕事をすればいいんだつて分かつたんだ。謝るのは、私たちの方だと思う。ずっと苦勞を背負わせちゃつて、ごめんなさい涼風」

明石が涼風の手を握る。涼風の頬を大粒の涙が伝つていた。

「あたいはつ……皆が好きだから、苦勞なんかじゃなくて……、うつ、うわあああ——」

明石は涼風の隣に座り、彼女の肩の震えが収まるまで抱きしめていた。

「あきつちゃん、この泊地の五年前のことを知りたいんだよね。あの作戦のことは、泊地の皆、普通は口にしないわ。それは、皆の心に刻み込まれた消せない傷だから。それでも、あの作戦があつたからこそ、この泊地の今がある。私たちはあの敗北の上に、今

の平和を必死で積み上げてきたわ。もしあなたが私たちの歴史を受け入れる覚悟があるなら、教えてあげる。五年前のことを」

あきつ丸は頷く。

「是非、教えてほしい。自分を、この泊地の本当の仲間にしてほしいであります」

明石はあきつ丸の覚悟を見て取り、ゆっくりと語りだした。

「あの戦いを越えてこの泊地で今も生き残っているのは、五月雨と夕立、伊58と私だけ。作戦の指令を本国から受けたとき、私たちも修羅場になると思っていたわ。覚悟もしていた。でも、あれは本当の地獄だった——」

2—4. 五年前

「何見てるの、時雨」

「雨——海が荒れそうだね」

ざんざん降りの窓の外を眺めていた駆逐艦時雨に、することがなく退屈そうな夕立が話しかけていた。リングは雨季に突入し、あの照り返すような大地を雨が静かに冷ましている。

「うー。いつまで続くつぼい？」

「分からない。でも、止まない雨はないさ」

そのうちじつと外を眺めるのに飽きてきた夕立に時雨は気付く。優しく微笑みかける。

「夕立。お姉ちゃんとお話しようか」

「うん！」

同じ部屋の片隅では戦艦武蔵が本を読んでいた。駆逐艦二人の会話を煩わしがることもなく、むしろ心地良い音楽のように聞きながら本のページを捲っている。彼女は戦前の日本文学をよく好んでいた。時折視界が霞むのか、天井を仰いでじつと目を瞑る。

がっしやんばららと、土間の方から金物の落ちる音や食器の割れる音が響いた。
「ちい、またやったか」

武蔵は苦々しげに言う。次いで聞こえてくる五月雨の声。

「わー！ 違うんですごめんなさいごめんなさい違うんですー！」

瀬戸塔也の妻である岬が呆れ返っていた。

「うーん。まだまだやらかすねえ五月雨ちゃん。ねえ、何が違うって？」

「うう、違わないですよ……」

ここ最近岬の腹が大きくなってから家事を手伝えるようにと努力している五月雨だが、散々失敗しては仕事を増やすことを常としていた。他の艦娘は見かねて代わりに家事を担当するようになったが、炊事だけはやらせて欲しいと五月雨は言いつて聞かない。そこだけは女として、譲れないものがあつたのだ。

「私はドジを、脱却するんです！」

「燃えているのは良いけど、ちゃんと片付けといてね」

「は……」

六年前のリングガ泊地は、武蔵と時雨を加えて六人の艦隊で運営されていた。その日、伊58と明石は工廠で武器のメンテにかかりきつている。

提督が、本国からの作戦指令を受け武蔵たちを招集したのは、それからすぐのこと

だった。

作戦の内容を聞いて、艦娘達は息を呑む。

——ソロモン海からジャワ海に向かって北進する人型深海棲艦が補足された。当標的はソロモン海沖上でコロニーを形成していることが衛星で確認されていたが、現在少数の艦のみを引き連れ移動。本国はこれを深海棲艦の首魁を意味する「姫級」と名付け、本作戦の標的とする。標的が内地に到達する前に、何としてもその進攻を食い止め艦隊決戦に持ち込み、確実に撃滅せよ。

「姫級……」

中でも冷静に、武蔵は呟く。

「提督よ。そいつを倒せばこの戦争は終わるのか？」

「分からない。だが、必ず終結の日を早めるだろう」

武蔵の眼は、そこが死地になることを覚悟していた。

「刺し違えてでも、必ず私が標的を沈めよう」

「……必死になるぞ」

「必死が前提の作戦だろう。ならば私が一花咲かせてやるさ。その代わり、他の誰も死なせない」

強く彼女が言い切る。瀬戸は、それを受けて艦隊に作戦の詳細を言い渡した。恐ら

く、最後に武蔵の意志を聞きたかったのだろう。

目指す状況は武蔵と姫級の一騎打ち。そのために艦隊は、北進する敵艦隊と会敵した後、姫級を分断する。武蔵の勝利を前提に、艦隊は可能な限り時間を稼ぐことが、この作戦の肝要なところだった。駆逐艦三名、潜水艦一名、特殊艦一名、この布陣で姫級の護衛艦と渡り合わなければならぬ事実、艦隊から言葉を奪う。沈黙が支配する中で武蔵は言った。

「大丈夫さ。いざとなればお前たちは撤退すればいい。必死とは言ったが、私も勿論、死ぬ心算はない。必ず生きて戻って来る。だから、戦力差を見極めるんだ。そしてまた、この地で会おうぜ」

そうして夕立の頭に優しく手を置く。

「……逃げない……私は、絶対、武蔵を置いて逃げないんだから……」

夕立は唇を噛んで目に涙を浮かべていた。武蔵と別れる場面を想像して、既に恐怖が全身を貫いているのだ。しかしそれが悔しくて、声が震えているのを気取られないように声を絞っていた。

「ならば死ぬな」

武蔵は言う。作戦を言い果たした後、瀬戸は決行日時を伝えた。明朝、〇五三〇、艦隊は標的と会敵する。

「本作戦はこれより倭作戦と号する——各自、作戦開始までの時間を過ごしてくれ」

提督が解散を告げた後電流が流れたような沈黙を、最初に破ったのはやはり武蔵だった。何の気負いもなく立ち上がる。

「さて、私はひとつ風呂浴びてくるかな。時雨、夕立、一緒にどうだ」

武蔵が二人の肩を引き寄せて捕まえる。夕立を思つての行動だろう。

「武蔵と入ると、お湯が無くなつてしまふよ」

静かな夕立の隣で、抵抗もせず時雨が言う。

「はっは！ 言うようになったじゃないか時雨。この武蔵、排水量も伊達では無いぜ」

「……そこを自慢されてもな。武蔵はちゃんと最後まで浸かつていてね」

それから三人は風呂場の方へと消える。作戦開始までの自由な時間。それをどう過ごすかを決めなければならなかった。

武蔵が行つてしまった後、伊58は張り詰めていた息を吐く。

「あーあ、やつぱり武蔵は強者でち。二人はこれからどうする？」

「そうですねえ。私もいつも通りに、過ごそうかなと。岬さんとお話していると思います」五月雨はまだ少し緊張している。

「私はゴーヤの魚雷発射管のメンテの途中だったし、戻つてお仕事かな。ゴーヤも来るでしよ。」

「そうだね。本番で使いこなすしかないなら、最後まで調整しておきたいでち」

伊58は先日改造されたばかりで、新しく搭載された装備をまだ一度も使っていなかった。魚雷発射管はその取り付けを誤ると大事故に直結するし、発射角度に僅かでもズレがあれば役に立たない。伊58と明石はその調整に時間を使うことを決めたらしい。

瀬戸岬はたまたま泊地にやって来ていた。運動の為に家から泊地までを歩く習慣を持つっていた彼女だったが、まさか緊急の、これほど重要な作戦に直面するとは思ってもいなかった。しかし彼女は元海軍司令官であった。艦娘を指揮し、共に戦った経験を持つっていた。彼女はこういう時に自分が狼狽えたり緊張したりするわけにはいかないことをよく知っており、五月雨を安心させるような、良き話相手となることができた。

時はゆっくり過ぎていく。しかし必ず定められた時刻はやってくる。艦娘たちは十分な休息を取り、その胸の中に剣のような意志を練り上げていた。作戦開始時刻となった。

漆黒の風濤が精神を鋭く抉り取ろうとしていた。月は黒雲に隠れ完全な宵闇だった。しかし、前日にあれほど降っていた豪雨は止み、今、日が層雲の彼方に昇ろうとしている。六人は真一文字に並んでいた。敵を待ち構えていた。武蔵は腕を組み、遙か遠方を睨みつけていた。

「さあ、来るなら——来い！」

水平線上に、幽鬼のごとく揺らめく影が立つ。その影が近づいてくるにつれて、輪郭は精細を増していく。それは夜を遊ぶ錆色の海鷗魚。美しく固められた屍肉の砦。誰も見たことのない新たな敵、深海棲艦の王、「姫級」の出現であった。

距離はもう三千メートルも無いだろう。事前の報告通り、数体の深海棲艦を引き連れていたが、そのどれもが、駆逐や軽巡、雷巡の雑魚であった。相手もこちらに気付いた様子で、陣形の乱れが消える。ただ一箇所だけ、例外があった。陣形が綻んでいるその箇所には、姫級と同じく、まだ一度も艦種を確認されたことのない艦がいた。

「あれは、何でしょう……初めて見る……敵ですね」

五月雨が熱っぽい息を吐く。深海棲艦は高位になり力を強めていくほどに、その姿形は人に近づいていくという傾向がある。姫級が引き連れているその未発見の艦も人の形を取っており、周囲の雑魚とは一線を画していることが分かった。五月雨たちは、それが戦艦級の戦力を有していること目測する。

しかし当時の艦娘たちは知っておくべきだった。深海棲艦が、高位になればなるほどにその知性を増大させ、ついに自我すらも勝ち得ていることを。最高位の姫級ともなれば人語を解し、複雑な感情を持つことができた。そしてその深海棲艦は——

色素の落ちた白い髪と大きな紅の瞳が真っ黒なフードの下から覗く。その表情は陰

の具合で沈んでいるように見え、拗ねている少女のようにも見えた。落ち着きがない様子で、進行方向と全く別の方角を眺めている。命令に忠実な他の艦と違って、姫級の意志から遊離しているようで、艦娘たちに注意も払っていない。

武蔵は艦隊に言い放つ。

「皆、作戦を覚えているな。奴らから姫級を分断した後、各々の艦隊決戦に持ち込む。お前たちは可能な限り時間を稼いでくれたらいい。この武蔵、必ずや姫級と決着を付け、泊地に凱旋してやろう！」

その力強い言葉に皆が頷く。

「作戦開始だ！ 伊58、頼むぞ！」

「了解でちー！」

先行雷撃を任された彼女は海中に深く潜り、魚雷発射管の圧搾機を起動させた。管の前扉から海水を裂く勢いで放たれた魚雷が、敵艦隊の中心に向かっていく。

「一体、妙な艦がいる。くれぐれも気をつけてくれよ——総員、行くぜ！」

魚雷が轟音を立てて炸裂した。水柱の圧力で、異形の怪物、駆逐口級と軽巡ホ級が引き裂かれロストする。姫級の真横に立ち上った海水を目印に、五月雨たち駆逐艦も魚雷を次々と打ち込んだ。

連続的に上がる水柱に、肉と鋼の断片と化す深海棲艦。混乱する艦隊の間に、続けぎ

まに爆発が起こる。その衝撃で、敵艦隊は予定通りの分離をみせていた。既に壊滅しかけている陣形の中で、あの少女型の深海棲艦の黒いフードが閃く。降り落ちる豪雨のよな海水と、周囲の駆逐艦や軽巡洋艦が破碎されていくのに紛れて、その艦は、自ずから姫級と距離を取ったように五月雨には見えた。

「そんな、いや……まさか」

五月雨は気味が悪い思いをしていた。作戦を想像以上に上手く実行できたにも関わらず、誘い込まれたのはこちらのよな、保護者から分断されたのは、こちらのよな

「何か……変じゃないですか……」

分断に成功し、敵艦隊と姫級を二千メートルは引き離した。そして五月雨たちの目の前にいるのは例の黒フードの艦と、雷巡子級の二体のみ。数の差から圧倒的な優勢であるのに、黒フードの艦は、どうにも落ち着き払っているように見えて仕方がない。

「僕も嫌な予感がするよ。あいつ、普通じゃないね」

時雨も違和感を感じ取ったようだ。それに先ほどから黒フードの艦が、じつと観察するようにこちらを見ている。その蛇のように絡みつく視線の気持ちの悪さを、誰しもが無意識の底で感じていた。

「でも……ひよつとしたら、あいつを片付ければ武蔵に加勢できるかもしれない。それ

で生還率がどれほど高まるか……」

明石が思いつきをふと口にする。その考えは、当初立ち込めていた決死の絶望感に差す、希望の光だった。その光は、誰もが自然に信じられた。それまで五月雨たちは、武蔵がこの戦いで轟沈し、泊地から欠けてしまう可能性を、実際のところ本気で考えたことは無かったのだ。海軍の事実上の最高戦力である大和型の名を冠する彼女が、この戦鬪に斃れるなど想像もできないことだった。なぜならそれは、艦娘の敗北を意味していたから。

それがこの時、希望を持つことで、初めて武蔵がロストする可能性に全員の考えはと行き当たった。夕立は、顔色を変えた。絶望が脳裏をかすめ、心を揺るがせ、そして武蔵を救うという希望が、夕立の全身に力を入れた。彼女は、きつと黒フードの艦を睨みつける。

「戦うしか——ないっばい！」

黒フードの艦は、その時初めて、艦娘たちに興味を持ったのかもしれない。闘争に転じた夕立を見て、機械的に小首をかしげた。それから何か行動を起こそうと動いたところで、焦熱と共に、直下の海水が盛り上がった。夕立が放った酸素魚雷が、直撃したのだ。

水柱が引いた後に、眼前に広がった恐ろしい光景に五月雨たちは凍り付く。雷巡子級

が、黒フードの艦に首を捕まれ、身代わりの盾にされていた。千級の下半身は吹き飛び、胃や小腸が何かの玩具のように垂れ下がっている。掴んでいた手を離すと、千級は音もなく海中に沈んでいった。自分の身を守るために仲間を犠牲にする深海棲艦の行動を、誰もが初めて目の当たりにした。

それから黒フードの艦は、艦娘たちを見据えながらゆっくりと表情を変える。知性を、感情を表出させる。心底愉快そうな、破顔一笑。

「カ、カ——」

声帯が出来上がっていないような歪んだその笑い声を聞いて、五月雨達は恐怖した。

「何なの……あれ」

思わず声が漏れる五月雨。艦娘たちが驚きに膠着して行動が起こせないのを見て、黒フードの艦はゆったりと攻撃に転じ始めた。それが手をかざすと、海中から無数の爆撃機が浮かび上がる。

「まさか、空母!? まずい、ゴーヤ! 逃げて!」

明石が叫ぶ。次いで来る千ポンド爆弾による絨毯爆撃は、海上を揺るがした。艦娘たちが悲痛に声を上げる。海中で伊58は、身を削ぐような水圧に全身がきつく振れた。

「……………」

海上に、伊58の呼気がぶつぶつと上がった。それは位置を知られない為に決して外

部に空気を漏らすことのない潜水艦の構造が破綻されたことを意味している。上昇してこない伊58に、明石たちは叫ぶ。

「よくも仲間を！　許さないんだからあああ！」

艦娘達は怒りに任せて、手にした連装砲を撃ち、魚雷を発射した。やたら滅法な攻撃は精度も落ち、敵への直撃を許さなかった。しかし夕立の放った酸素魚雷だけ、正確に黒フードの艦へと向かう軌跡を描いていた。

それは未だ笑っている。

全く予期せぬ中間地点で、夕立の魚雷が炸裂し、水柱が上がった。その水柱の高さは従来の数倍はある。魚雷と魚雷がかち合った場合に起こる超規模のキャビテーション。それは直線軌道の魚雷同士をぶつけないと起こりえないことだ。つまり、敵が夕立の魚雷に狙って魚雷をぶつけたということ。

「そんな……あり得ない……」

明石は絶望する。重雷装。そして艦載機の操作。その二つを同時に行える艦など、あつてはならない。例え成立したとしても、その性能は一つの兵装に特化した艦のものに遠く及ばない筈だ。しかし現実には、目の前にいる敵は、その常識を遥かに凌駕する戦力を有していた。

その艦は、退屈を紛らわす遊び相手を見つけた歓喜に打ち震えている。五月雨たち

の、長い長い悪夢が始まった——

結論から言うと、作戦は予定されていた形で成し遂げられた。姫級と一騎打ちに臨んだ武蔵は、姫級を討ち取った後、仰向けに波間に揺られて暁の空を見上げていた。その腹部には大穴が空いていたが、表情は清々しく、陰りも苦悶も見られない。

「私はずっと、死に場所を求めていたのかも知れないな」

独り武蔵は呟く。それから、自分の為に今も戦い続けている艦隊の方へと顔を向けた。

「ああ、どうか、お前たちは生きて泊地へ帰っておくれ……。それ以上、私のために戦ってはいけない。私はもう使命を果たしたんだ。お前たちには、まだ未来が残っているだろう?」

片手をかざすと、懐かしい空が見えた。いつの時代も、どの場所も、たった一つのこの空の下で繋がっていたのだ。武蔵は「あばよ」の言葉が、「また会わばや」から来ているという説を信じている。その方が、格好良いと思うからだ。だから最期は、その言葉を言つて別れることに決めていた。

「あばよ——」

また会いましょう。

——信じていれば、願いは叶うだろう?

海水が武蔵の中に這入り込み、身体は二度と浮き上がることがなかった。

その光景を五月雨率いる艦隊は目の端で捉えていた。武蔵を救うことができなかった。しかし、作戦は達成された。五月雨たちは黒フードの艦から距離を取り、扇型に散開して数時間を耐え忍んでいた。絶え間ない攻撃と死への緊張に晒され、皆一滴すら戦意が残っていないかつたし、たつた今唯一の希望も潰えた。黒フードの艦は愉悅に浸つた表情を浮かべていたが、少しづつ退屈し始めていた。攻撃も単調になり、その分正確に五月雨たちの身体を抉るようになっていた。五月雨たちはそれを皮一枚でかわし続けていた。

艦隊は、自分たちが敵の気分によつて生かされているということに、とつくに気付いていた。それほどの戦力差があつたにも関わらず、艦隊は一步も引かず、またこれ以上のロストを出さなかつた理由は、双方の利害が一致しているところにあつた。

つまり、艦隊は、敵を引きつけて時間を稼ぐことが目的だつたし、敵は、目の前の玩具で長く退屈を紛らわしたいだけだつた。だから、五月雨たちは付かず離れず戦い続けることを選び、消耗戦を持ちかけた。

だがもう限界だつた。敵は遊びを終わらせようとしている。ひよつとしたらこの艦は、姫級と対等同位な存在なのかもしれない。だから姫級を庇つたりせず、失つても動揺一つ見せなかつたのだろうか。明石の頭に圧倒的な敗北感が過ぎる。——だとした

ら敵を残したこの戦いにどれほどの意味があつたのだろう。

「逃げよう！ 作戦は終わつたんだよ。私はもう……ここにはいられない！」

明石が叫ぶ。時雨も気がついた。

「そうだ……帰らないと。僕たちは、武蔵と約束したんだ……」

目的を思い出したように、五月雨も目配せする。

黒フードの艦が、爬虫類のような冷たい眼でその様子を見ていた。

夕立が、震えていた。夕立は、目の前で起こっていることの意味が何一つ理解できなかった。武蔵を救えなかったこと。敵に、全存在を否定され蹂躪されたこと。仲間たちが、絶望に心を折つたこと。その全てが夕立を押し潰し、現実が奔流となつて魂を攪拌していた。臓腑が怒りに煮え返り、内燃機関が暴れ狂つた。

「あ、ああ、うわああああああああ——！」

夕立は弾かれたように飛び出す。その手には魚雷を握っている。誰の眼にも明らかな特攻に、五月雨たちは悲劇を信じた。

「駄目！ 夕立、やめて！」

明石の叫びも虚しく、夕立は船速を上げる。五月雨は目を背け、耳を塞いだ。

「お前なんて、お前なんてええええええええええええ！」

黒フードの艦は夕立が狂乱の唸りを上げて突っ込んでくるのを見て、細胞が沸き立つ

たような、喜色満面の笑みを浮かべていた。まるでこうなることを待っていたように、ゆつたりと待ち構えている。明石はゾツとした。夕立を失うと思つた。無駄死にさせたいと直感した。

時雨だけが、夕立の変化にいち早く気付いていた。夕立が敵に立ち向かうのと同様に、時雨も駆け出し、最大船速で夕立の前に立ち塞がって、両手を広げた。駄目だよ、と笑っている。

「夕立、僕は君を失つたら、とても悲しいよ」

一瞬の光景であつた。海中から現れた鋼鉄の龍が、時雨の身体を連れ去つた。その龍は、油に濡れ、波に塗れ、海から引きぬかれた。骨格が砕けるような鈍い音が鳴つた。海龍はその牙で、時雨の胴体に喰らいついている。その生物は、黒フードの艦の尾部と直結していた。

「時……雨?」

夕立は言葉を失つた。目の前で時雨の身体が植物の茎のように折れている。宙に垂れ下がつた怪物の口に胴体を挟まれ、海面と並行になっている。二体で一つの深海棲艦だつた黒フードの艦の尾部のようであるその生物は、込み上げてくる力に震え、時雨を噛み砕かんと咆哮していた。先端に装備された三基の砲塔がぎよろぎよろと狂つたように動いていた。

夕立は声が出なかった。少しも動くことができず、呆然と時雨を見る。時雨にはまだ意識があつたが、その眼はもう自分が助からないことを悟つていた。それでも彼女は掠れ消え入りそうな声で語りかける。

「駄目だ夕立。僕たちは帰らなくちや、そうだろうか？」

「時雨……やだよ……いやだ……」

時雨が顔を振つた。

「夕立、もう僕を見ちゃ駄目だ。さあ……早く、行つ——」

昏い、余りにも軽い音が鳴つた。それから尾部が持ち上がり、真つ二つに折れた時雨が上空に高く掲げられた。夕立はぼうつと突つ立つて、黒フードの艦の笑い顔と、棒きれになった友だちを見上げていた。尾部の口腔が赫々と光る。黒フードの口角から泡が吹く。怒りを体現したかのように龍が吼えた。轟音と共に走つた閃光が、時雨の身体を引き裂いていた。龍の喉奥に覗く巨大な砲塔から、硝煙が立ち上つていた。

「レ、レ——縋ス綱ユ」

血煙の中、黒フードの艦は絶頂を迎え、言葉にならない言葉を口走る。

「——縋ス綱ユ綱「綱ウ隲ク蟲力縋ヨ譌ヲ縋！」

この世のものではない言語で唸っている。

「蠟工諧域律1942 蠟工1 諧 —— 1945 蠟工8 諧15 譌！」

突如、黒フードの艦の背後に爆轟が起きた。全てを洗い流すような水を夕立は被る。遠方から聞き知った人の怒鳴り声がある。

「何をしているでち！ 皆、早く逃げるよ！」

伊58の魚雷が着弾したのだった。夕立ははつと我に返り、その瞬間全身を突き抜けた恐怖に、弾かれたように走りだした。嫌だ、嫌だと小さく呟きながら、全速で遁走する夕立の眼にはもう何も見えていなかった。

放心している黒フードの深海棲艦から、艦隊は逃げだす。脇目もふらず、一度も振り返らず、沈んでいった武蔵のことも、時雨のことも、誰の頭に過ぎることも無かった。その日艦娘達は、心に決して消えることのない傷を負った。

作戦を終え帰還した艦娘たちを迎えた瀬戸は、自分の指揮が招いた絶望と悲劇の結末を知り、号哭した。生きて戻ってきた四人に、よく帰還してくれたと、何度も言い、そしてそれ以上のことは何も言えなかった。瀬戸が何と声を掛けようとも、艦娘たちの心は断絶していた。その日、艦娘たちは余計な口を聞くことも無く、誰もが丸一日以上は死んだように眠った。

あの地獄のような倭作戦の日から瀬戸は罪の意識に囚われ続け、艦娘たちのPTSDに対して自分の全てを捧げていた。あれから瀬戸は、艦娘たちに決して海戦を行わせず、泊地業務を可能な限り縮小した。医師と相談し、取れる限りの処置を取り、注意を

払い尽くした。それでも、艦娘たちの症状は重く、改善の兆しは訪れなかった。

五月雨や伊58は砲声を聞けば持つているものを取り落とし、耳を塞ぎ蹲つては震えた。明石は工廠に入り浸り、滅茶苦茶に仕事に打ち込んだ。海底資源を引き上げる為のクレーンの改良や、しなくてもいい海洋調査を黙々と続けていた。そうしないと、気がおかしくなりそうだと言つて。それから、彼女は夕立と共にいることが多くなつた。はつきりと口には出さなかつたが、時雨と武蔵の代わりを務めようと思つていたのである。

夕立の症状が最も重く、凄まじかつた。黙つていると思えば、突然泣き叫び喚き散らす。夜中に悪夢に目が覚め、何時間も独り言を言い続ける。存在しない夕立や武蔵に話しかける。初めの一ヶ月は、夕立を薬で無理矢理にでも落ち着かせないと、何をするか分からなかつた。そんな彼女の不安定さに、五月雨や伊58がノイローゼを発症しかけていた頃のこと。

岬が病院先で、出血死した。分娩中のことであつた。体の弱かつた彼女は、もともと出産困難を予想されていたが、決して死亡率が高いわけではなかつた。幾多の不運——循環器系の不調、施術の微かな不手際、体力の波——それらが積み重なつて死の渦となつた。彼女の体力では、その激流を泳ぎ切ることができなかつた。岬は深い痛みの中で、永遠に失われてしまった。運命がどこまでも泊地を追い込もうとする。それで

も彼女は、最期に幸福に向かって手を伸ばした。自分の子供を取り上げて、微笑んだ。皆に伝えて欲しい、と彼女は助産師に言う。ここがその幸福の始まりに違いないと。

失意の中で誕生した少女、雨見をこの泊地で育てたいと言ったのは五月雨だった。生前の岬と最も親しくしていた彼女は、ほとんど理屈でなくそうすることを望んだ。その突然の申し出に瀬戸は戸惑ったが、ひよつとしたら、艦娘たちのPTSDの緩和になるかもしれないとも思った。それは半分は拙い願いであり、半分は賭けだった。瀬戸は願いに賭けたのだ。

保育器の中で静かに二週間を過ごした後に、泊地にやってきた雨見を、皆が恐る恐る抱いた。触れただけで壊れそうだと、伊58は言う。明石も、これが命かと嘆息し、五月雨は愛おしそうに、いつまでも彼女の体温を感じていた。

最後に、黙ってじつと雨見を見つめていた夕立が、彼女を抱くことになった。夕立は、私には出来ないと頑なに拒絶する。彼女は一度、泊地の中で滅茶苦茶に暴れたことがあった。日誌を破り捨て、家財道具を蹴り飛ばし、泊地の全員で押さえつけるまで物を壊すのをやめなかった。破壊衝動に抑制が付いていないと診断され、夕立はその事件を起こしてから、酷く自分を責め感情を押し殺すようになる。それでも瀬戸は、遠慮する夕立に雨見を手渡した。

抱いた腕の中に、トクンと微かな心音がする。暖かい火が灯ったような、そんな柔ら

かい感触を抱きしめて、夕立ははっとした。しわくちやの渋顔が、夕立の眼を覗き込んで愉快そうに笑っていた。夕立は思わず、雨見の顔に手を伸ばして、彼女の涙を拭きつけてやっていた。それは雨見の涙ではなかった。夕立が彼女の顔に溢していた涙だった。

「あ、あ……あああ——！」

夕立は雨見を抱き寄せて、声を上げた。

「守る……」の子は私が絶対に守るんだからああああ……！」

天井に向かって、わんわんと夕立は泣いた。

「ちよ、ちよつと夕立、その子窒息してない？」

明石が止めに入らなければ、夕立はいつまでも雨見を離さなかったかもしれない。いつかのように泣き笑っていた夕立がそこにいた。

その時瀬戸は、雨見を泊地で育ててみようと、決意したのだ。

黍作戦の後から海は不思議と静かになった。雨見はこの泊地で健康に育つ。よく泣き、よく食べ、よく皆を困らせた。四ヶ月後には抱っこした五月雨の顔を触り、八ヶ月目には部屋を這い回り、ちょうど一年が経ったとき、雨見は皆に連れられて海を見た。砂に塗れながらも、瀬戸の体を掴んで自分の足で立ち上がった。そして、突如として高さを持って広がった世界を小さな瞳で眺める。真昼の海は光を反射して眩しく輝く。刻々と表情を変える波間の輝きを、雨見はいつまでも眺め続けて飽きなかった。

その間に、駆逐艦涼風が泊地にやってきた。彼女は泊地の事情を知ると同情し、持ち前の明るさで艦隊に馴染もうとする。彼女の竹の割ったような性格は、何度か、艦娘たちの心の傷を突くことがあった。生き残ったものは今を楽しまなきや損だと考える涼風を、一度、五月雨は叱ろうとした。本当に大切な人を失った時、同じことが言えるかと問うた。涼風はその時に、言い返す。

「塞ぎこんで黙ってたら、何も始まんないよ。一度でいいからあたいの心にとーんと来る言葉を言ってみない！」

本音で会話をしてくれと、涼風は言う。それは不幸を偲んでいたかった艦娘たちにとって乱暴な要求だったかもしれないが、前を向くためには必要なことだった。その日から五月雨たちと涼風は、お互いにすれ違いながらも、言葉をぶつけることで少しずつ距離を縮めていく努力を諦めなかった。

仲間が増えて更に一年。雨見は言葉を覚え始め、五月雨は料理を覚えた。ようやくまともなものが作れるようになった。ささやかな変化だが、五月雨にとってはこれ以上ない成長らしい。失敗ばかりだった彼女は、自分に自信を持つてもいいのだと思うようになった。

泊地近郊にまで縮小していた海上防衛の範囲を、徐々に広げ始めたのもこの頃。一度は完全に戦意を折っていた艦娘たちだったが、少しずつ、戦う意志を取り戻していく。

解体し、艦娘を辞める選択もあつたが、皆戦い続けることを選んだ。それ以外に生き方を知らないからと彼女らは自嘲するが、瀬戸には、戦うことで彼女たちは自分の存在意義を取り戻そうとしているように見えた。

U—511がドイツから着艦する。後に改造されて呂500となる彼女は、無口で、一步引いたような、色白の少女だつた。口では皆と仲良くなりたいたいと言いつつも、今一步泊地の艦娘たちと打ち解けようとしないう呂500がもどかしく、伊58は先輩風を吹かせて彼女を様々な場所に連れ立つた。潜水艦の戦い方から、箸の持ち方まで、付きつきりで教えた。いつの間にか伊58はU—511の教育係となつていた。一年後、教育の成果が実り、彼女が改造のために本国へ発つた時、伊58はうっかり感動しかけた。帰つてきたU—511改め呂500は、見違えるほど明るく、天真爛漫な少女に変身していた。それが彼女本来の性格だと伊58が気付くまでには更に時間が掛かつた。ついでに彼女は日本国籍も取得していた。

雨見は六歳になり、村の学校に行くようになった。言葉を覚えるのが好きで、新しいことを覚えては、艦娘たちとお喋りをする、そうした毎日を幸せそうに過ごしていた。雨見の変化は、泊地の変化でもある。雨見が新しいことを覚え、話したり、行動したりするのを見て、泊地の艦娘たちは、雨見の中に新しい雨見を発見する。成長してゆく彼女を見て、一喜一憂する自分たちに気付く。艦娘たちは、雨見を育てることが、そのま

ま自分自身を取り戻すことであるのにふと気付いた。

時が過ぎてゆく。どんな問題も、時間が解決してくれるのだろうか。艦娘たちは、PTSDを忘れていた。あの修羅場から六年が経った今、全ては過去のこととなつてしまった。この年の初めには大規模な震災を経験する。六年前の絶望を思い出させるほどの被害が、各地に爪痕を残す。しかしその復興支援に尽力していると、過去を思い出す暇もない。むしろ過去は思い出されるものではなく、血液のように体中を流れているものだつた。五月雨が皆の帰りを待っていることができず、明石が仕事と生活を両立できているのも、夕立が自分を責めないでいられるのも、伊58が海に潜れるのも、涼風が五月雨たちを支えられるのも、呂500が自分らしくいられるのも、全て、あれからの日々が彼女らの血の中に流れているからだ。だからこそ、彼女たちは、今も平和のために戦い続けることができる。大切な人を守るためなら、何度でも立ち上がってみせ

る――

2—5. 悪夢と胸騒ぎ

「あんまり遠くには行くなよ」

そう言いつけておいた雨見が浜辺を歩くのを、泊地の庭先から瀬戸がポケットに手をつまみながら眺めていた。透き通った海の浅いところに珊瑚礁と魚がいて、それを雨見はじつと観察していた。仕事の合間に時折訪れるこうした穏やかな時間。瀬戸はこのひと時を見守っている。そうしていると、ふと、彼の胸の奥を不思議な晴れ晴れとした感情が満たすことがある。

この平和な時間がいつまでも続けばいい。自然とそう思う。その考えが拙い理想に過ぎないことは知っている。だが、自分たちはその願いを持ち続けることで、ここまでやって来ることができたのだ。何かを願うという力が、人間の強さなんじゃないか、この頃彼はそう思う。

雨見が瀬戸を呼んでいた。両手を振っている。

「お父さんー！ 海の中に、面白い魚がいるよー！」

雨見は瀬戸に魚の名前を教えてもらいたいのだろう。早くこつちに来て欲しいと、小さく飛び跳ねていた。仕方が無い、と若干重い腰を上げ、瀬戸は日の照りつける浜辺の

方に向かおうとする。

「見て見て、大きな、黒い魚——！」

太陽が輝いていた。雨見が喜んでゐた。砂粒が風に吹かれ、貝の断片を覆い隠した。雨見の背後に現れた黒い影が、その鋭い牙を無防備な雨見の首筋に食い込ませた。雨見は瀬戸の方を向きながら、まだ自分が襲われたことに気付いてないように、手を振り上げている。柔らかな人体が、巨大生物の重みにひしゃげていく。

弦の切れたような音が瀬戸の中で鳴り、目に映る全てがコマ送りの無声映画のような不安定な光景と化した。瀬戸の脳が、現実を受け入れることを拒絶している。青白い眼をした真つ黒い生物の下に、雨見が死んで、血だまりが生じている。滅裂な感情が、瀬戸の腑の底を突き抜けて、喉元で精神が弾けた——

「——！」

叫びを上げて、夢から覚めた。瀬戸は全身に汗をかいていた。仕事中に執務机に突っ伏して眠っていたらしい。振り返ると、布団に雨見が寝かされていた。額の冷却ジェルシートが熱に乾いて剥がれつつある。

深く息を吐いて、瀬戸は立ち上がる。執務室を出て、風呂場に向かおうと土間を踏んだところで、寝間着姿のあきつ丸に出会った。あきつ丸は歯ブラシを口に突っ込みながら、目を丸くしている。

「提督殿、どうしたでありますか？ 何やら物凄い雄叫びが聞こえましたか」

「いや、ちよつとな……」瀬戸は口ごもる。

「ははあ、その様子だと悪夢でも見たのかな。そうだ、自分が夢占いでもしてあげましようか。こう見えて自分、夢分析には詳しいのでありますよ。提督殿の性の悩みをずばつと解決してみせるであります。というか、性の悩みに違いはない。寡夫の元に美少女が集まって何も起こらない筈がない。寡夫の元に美少女が集まって何も起こらない筈がない」

「どうして、二回言うんだ」

「別に、ライトノベルのタイトルみたいだと言いたかったわけでは無いのであります。というかむしろエロゲーっぽいな……。いや、問題はそういうことではない。問題は、提督殿の性の悩み、じゃなくて、提督殿が一体何に思い悩んでいるかということなのでありますよ。別に、夢の内容を教えてくれるだけでいいのだが」

瀬戸はあきつ丸の申し出を断った。

「やめておこう。俺は、あまりそういう分析が好きじゃないからな。それに、どうしようとも、人は心理下の恐怖からは逃れられないだろう」

あきつ丸はそうでもない、と言う。

「鈍感になれば、人はあらゆる苦しみから楽になれるでありますよ」

そして彼女は懐から、十八番の武器である幻燈機を取り出した。

「それに、こいつで暗示をかければ、嫌なことは一発で忘れられるであります」

「お前のその武器は何なんだ……」

あきつ丸の冗談に聞こえない冗談に瀬戸は戸惑うしかなかった。それから彼女はぽつりと言う。

「そういえば提督殿。今日、明石殿に、この泊地の過去についてを聞いたであります」

別れようとしていた瀬戸は、ぴたりと動きを止める。別段表情を変えるでもなく聞き返した。

「そうか。お前はどう思った？」

「別に何とも」

彼女は言う。

「ただ、この泊地がどのようにして生まれたのかが、分かりました」

その言葉を聞いて、瀬戸は困ったように頭を掻いた。

「頼みがあるんだ。雨見を見守つてやつてくれないだろうか。そしてもし、俺の居ないところで雨見に何かあつたら、お前も、雨見を助けてやつてくれないか？」

あきつ丸は当然だというように、口端を上げた。

「お安い御用でありますよ、提督殿」

3—1. 雨見の失踪

大雨で浸水被害が出て、災害避難所の支援に泊地の全員が出払っていた。避難所は小学校の施設を利用しており、体育館は百人近くを収容できる。瀬戸は、避難民をまとめる自治区のリーダーと話を付けていた。艦娘たちは方々で、食糧や水や毛布を避難民の人たちに手渡していた。津波は恐ろしいが、雨は止みかけている。この人々は少なくとも数週間後には、元の生活に戻れるだろう。

扉が強く開け放たれる音。明石が蒼白の顔で避難所に入ってくる。瀬戸の元へ駆けつけて、耳打ちをする。それを聞いて、瀬戸の顔色が変わる。瀬戸は避難所を飛び出した。

雨見の姿がどこにもいない。泊地に物資を取りに戻った明石が、瀬戸に伝えたことだった。雨見は高熱を出して一人ではどこへも行けない筈である。人のいない泊地で、どうして消えたというのか。

「一体、どういうことだ……!」

車を飛ばして泊地に戻ると、明石の言った通り、家の中に人がなかった。玄関に雨見の靴が無くなっている。はたと瀬戸は立ち尽くす。

真つ先に頭を過ぎったのは、自分たちの不在を狙った誘拐であつた。海の中から氷山の一角が浮かび上がったように、終わらない子供の誘拐事件が、ここに来て眼前に現れたのか。思考が怒りに焼き付きそうになつたが、しかし瀬戸は冷静に考え直す。家に雨見や誘拐犯が暴れた痕跡が見られない。壁も、薄暗い土間も、部屋も、全て生活感だけ漂わせてひっそりとしている。雨見は、自分の足でこの家を出たのだと思つた。

ふと、この間のことを思い出した。夢にうなされて、震えながら瀬戸の体に抱きついた雨見。また、あのような夢を見て、飛び起きたのだろうか。そして泊地に誰もいないのが寂しくなつて、探しに出てしまつたのか。

瀬戸はそう考えながら家を出る。薄く雨が降つて遠雷が鳴る。何気なく海の方を見やつて、瀬戸の体が驚きに硬直した。

砂の上に付いた小さな足あと。覚束ない足取りのプロット。それが点々と――
瀬戸の動悸が収まらない。

――点々と、海へと続いていた。

慄然として、足あとの消えた波間の元へ瀬戸は走つた。彼の想像に、あらゆる最悪が像を作つては弾けている。

「雨見、雨見！ 溺れたのか!?!」

息せき切つてこの広い海を見回す。遠方で荒れた波が岩礁に叩きつけられていた。

腰まで海水に濡らし、瀬戸は血眼で雨見を探そうとする。海底の岩陰、潮流の先、沖合、雨に泡立つ海の中、たった一欠片の気配も見逃さないように。瀬戸は鬼気迫る形相で目を凝らしていた。

沖の方に突き出している岩場が、ふと瀬戸の眼に止まった。村民の間では冠島と呼ばれているその岩の一つに、何か赤いものが引っかかっている。瀬戸の視力が、それが何なのかを捉えたとき、彼は弾かれたように涙を走った。向かう先は船の係留所。彼が見たものは、雨見が着ていた、カーデイガンだ。

係留所の栈橋に、打ち捨てられた古い鋸があつた。瀬戸は何を思ったか、その鋸を小型ボートに放り投げ、自分も飛び乗る。ボート後部の船外機のチョークを全開にし、スターターグリップを何度も強く引いた。しかしエンジンが掛からない。七回、八回、引き続ける。

「馬鹿野郎！ 動け木偶の坊！」

怒り任せに引つ張つた十三回目でモーター音と共にエンジンが漸く作動し、船外機が暴力的に震えだした。瀬戸はクラッチレバーを後ろ手に、冠島へ向けてボートを走らせる。荒天を雲が逆巻いている。船を出すには、風が疾すぎる。

瀬戸の胸の内は、恐ろしく冷たかつた。何かがおかしい。違和感が疑問に変わり、自分の行動に確信が持てない。雨見があの場合まで行ける筈がない。例え溺れたとして

も、この海の潮流は冠島に何も運ばない。それでも雨見の手がかりを見てしまったからには、確認しに行かなければならない。瀬戸はこの仕組まれたような状況の中で、艦娘たちを連れて来なかったことを激しく後悔していた。

「俺の直観も、鈍つたものだな……」

岩場に辿り着いた瀬戸を出迎えたのは鋼鉄の外郭を持つ生命体、深海棲艦。たつた一体の駆逐艦だが、その体軀は二メートルを優に越える。生物発光の青白い光が、その瞳から尾を引くような輝きを残していた。

瀬戸は手元にあるカーディガンに目を落とす。それは確かに雨見の着ていたものだ。灰かに暖かさが残っている。これは一体どういうことだろう。ここには雨見はいない。上着はあったが、それだけだ。雨見がここまで来れる筈がない。誰かが、この場所に雨見の上着を置いたのだ。瀬戸は疑問と共に、その上着を自分の腕に巻きつけた。

「ところで、俺の直観は完全に鈍つてはいなかったらしい。コイツを拾つていて良かった」

瀬戸は片手に銚子を携えて構える。半身になり、深海棲艦を見据える。イ級の単装砲の照準が、瀬戸に狙いを定めていた。

「懐かしい。昔はよく、銚子で魚を獲つたもんだつたな——」

瀬戸の口元が笑った。

3—2. 洞窟にて

潮騒の音が空洞に響いている。鍾乳洞の壁面が薄明るく照らされていた。その中にある手作業で舗装されたようなステップを、長靴の音が一段一段と下っていく。その度ごとに、洞窟に映し出される影も揺らめいていた。カテナリー型に垂れ下がる鍾乳石たちの影が、刻々と洞窟の模様を変化させ、ある人影が、その中に長く伸びている。

その人影は、片手に光源となるランプらしきものを乗せている。その光源からの光が、洞窟内を怪しく昏く照らし出していた。

いや、影に映っていたのはそれだけではない。光源を持つ人物に付いてくる動く小さな影法師がある。戦闘機模型の影を運んでいるような二つの影がある。走っていて、ずっこけた影がある。他にも、鍾乳石の影から顔を覗かせるようなものも。それらは影の中に潜んでいる。それらは小人のようである。あたかも、妖精のようである——

洞窟の中を、その人物はずっと下っていく。そのうち、広い空間に出た。吹き込む涼やかな風の中に、わずかにアンモニアと磯の臭いが混じっている。目の前の蹲っている少女に向かって、たった今洞窟を下ってきたその人物は声を掛けた。

「探したでありますよ、雨見殿」

光源——幻燈機の明かりが座り込んでいる雨見を照らした。あきつ丸がその肩にそつと手を触れる。ところが、声を掛けられた雨見は、ぴくりとも動かない。ただぼおつと、目を開けて前方を眺めているだけだった。あきつ丸は雨見の体を揺すつてみる。強く揺すつてみる。ぐらぐらと赤べこのように首が傾ぐが、雨見は意識を保っている様子がない。まるで魂だけが抜かれてしまったようだ。

「うーむ、こいつは気を当てられてしまっているな……」

そうしてあきつ丸は幻燈機を掲げて、洞窟の奥にまで光を送った。

ぬめつたような白い肌が光を反射する。石灰岩の中に、浅く呼吸をする生命体が紛れている。暗闇の中から現れたその生物は、石柱に磔にされた深海棲艦、四肢をもがれ欠損部に鎖を繋がれた、憐れな姫級だった。先ほどから鼻をつく異臭は、この生物に近づくとほど濃く空間に溜まっている。あきつ丸は手で触れられる距離まで近寄つてそれを見上げた。

「いやー、これはとんでもないものを見つけちゃったでありますなあ。この形状、泊地棲姫に違いない。六年前にこの近海でロストした筈の大ボスであります。生きていたんだなあ」

驚いたように彼女は言う。いや、あえて口にしていてという感じで、彼女は言葉を續けていた。

「どうしてこんなところに封じられているんだらうなあ。こんな風に手足を切断されて。誰かがここに繋いで、生かさず殺さず管理していたのでありますな。おかしいなあ、話では泊地棲姫は戦艦武蔵と共にロストした筈なだけどなあ。ねえ、明石殿？」

あきつ丸の眼は、泊地棲姫のさらに奥の岩陰の一点を注視していた。あきつ丸が問い掛けて、その先にあつた微かな呼吸が止まった。しかし観念したように、工作艦明石が姿を表す。

「……何で私がいるって分かったのかな、あきつちゃん？」

彼女の手の懐中電灯の明かりが点いて、逆にあきつ丸を照らしだした。

「別に、当てずっぽうでありますよ。人の気配は感じていたので、誰だろうなあと考えたところ、矛盾を含んだ昔話を語ってくれた、明石殿をまず疑ってみましたであります。どうしてここに泊地棲姫がいるのでありますか？ それより、明石殿は何故ここに？」

あきつ丸に問われて、明石は困ったように眉を潜めた。

「えーっと、矛盾って言われても、分からないわ……。私も、この深海棲艦がこんな風に生きていたなんて思わなかったし、六年前の話に嘘は一つもついてないよ、あきつちゃん。私は、雨見ちゃんを探してここに来たの。ほら見て、この貝殻」

明石は紫色がかつた貝殻をあきつ丸に見せる。

「これはこの間雨見ちゃんが拾ってきた貝殻。この辺りでは見ない種類だと思つたんだ

けど、詳しく調べてみたら、この近辺に広く生息する二枚貝が変形、変色したものだつたのよね。これと同じような侵食を受けている貝殻がこの洞窟付近には特に多かった。その侵食の元凶を探していたら、ここに辿り着いてしまったつてわけ」

「ふーん。雨見殿を探しているうちに、貝殻探しになっていたわけですか、おかしな話だ」

あきつ丸がせせら笑う。

「雨見ちゃんの家を出てどこかに行くとしたら、こつちの浜かと思つてね」

「熱にうなされているのに貝殻を探しに？ まさか。明石殿はもう少しまともな嘘をつくべきだ」

突き放すようなその言葉に明石は笑顔を崩さずに、あきつ丸に問い返した。

「じゃああきつちゃんは、なんでこんなところにいるのよ」

「自分でありませうか？ 自分は雨見殿の見た夢が気になつていたのであります。洞窟から自分を呼ぶ声が聞こえたと、雨見殿はうわ言で毎晩うなされておりました。その夢を精神分析的に解説して、ここまで辿り着いたのでありますよ」

あきつ丸は飄々とそう言う。表情を変えない明石の握っている貝殻に、一筋の亀裂が入った。

「あなたも、大嘘つきみたいね……！」

「気が合いますな。初めて見た時から明石殿は自分と同類の臭いがした」

二人の艦娘は向き合つた。洞窟に風が吹き込んで音が響いている。あきつ丸は溜息をひとつつき、自分の制服から黒い軍隊手帳を取り出し、明石に突きつけた。

「申し訳ないが明石殿、あなたを軍事違反で拘束させてもらう。容疑は機密生物の違法所持、化学物質による深海棲艦の不正な操作、それから深海棲艦との取引。分かっているだけでも大変な反逆罪であります。抵抗はしないでもらいたい」

彼女が持つている軍隊手帳は黒色をしていた。それが証明する所属は、艦娘の所属である海軍ではなく、揚陸艦の彼女の出身にあたる陸軍を示していた。陸軍憲兵——あきつ丸は、軍隊の闇の中を跋扈し違反を取り締まる、軍事警察の一構成員であつた。

「なるほどね、そういうことだつたんだ」

明石が嬉しそうな声を上げる。

「この時期に新しい艦娘がうちに来るなんて珍しいと思つていたけど、裏切り者探しの憎まれ役、それがあなたの本来の任務だつたのね」

あきつ丸はそう言われて不機嫌そうに明石を睨みつけた。

「ええ、おかげ様で大変だ。始めは深海棲艦の操作の疑惑を調べることが任務だつたのであります。この泊地の海域は、平和すぎた。ここ数年で、他の海域の戦線は激化しているのに、ここだけ六年前と変わらない。意図的に戦線を動かしているのではないかと

「いう疑いがあつたのであります」

あきつ丸は石柱に繋がれている泊地棲姫を指差す。

「あれの存在で謎が解けました。姫級が体内に蓄えている、深海棲艦のコロニーを構築するための集合フェロモン。それをこの泊地棲姫から抽出し、周囲の海域にばら撒く。そうすることで、この近海から他の海域に深海棲艦を集めることができる。そうでありますな？」

明石はそれを肯定した。

「ええ、そうよ。でもそれは泊地の為を思つてやったことで、将来的にも集合フェロモンの合成技術は大本営に益となるはずよ。研究することがそんなにいけないことかしら？ それよりも、深海棲艦との取引つて、どういうこと。私がそんなことをした証拠でもあるつていうの？」

あきつ丸は悲しそうな顔をして、明石の目の前に、磁気テープが収められたカセットを投げた。

「工廠の中で発見した、深海棲艦と明石殿との無線通信記録であります。ここに、泊地棲姫と深海棲艦の技術を交換する約束が交わされていた。動かぬ証拠であります」

明石の顔から表情が消える。無言が場を包む。あきつ丸は帽子を深く被り直した。

「泊地から明石殿が雨見殿を連れてこの洞窟に来るまでを、観測機が確認しております」

た。その時既に、雨見殿にはほとんど意識が無かった。そして、泊地の浜に、足あとを付けさせたまま、海伝いにあなたがたはこの洞窟までやってきた。途中ご丁寧に、雨見殿の上着を沖合の岩場に隠して。明石殿、あなたは泊地を売ったな」

俯いた明石の表情が、沈黙に翳る。

「ふ、ふふ、ふ」

明石の暗闇の底から、押し殺したような笑い声が聞こえた。

「全部、見てたんじゃない……!」

「雨見殿を見守っているように、提督に頼まれてしまったからな!」

鬼気迫る意志であきつ丸は明石の元へ一歩踏み出す。明石は後ずさりする。あきつ丸が幻燈機を輝かせようとしたその時、あきつ丸の背後で、物音がした。

「あ、雨見殿……?」

振り返ると、雨見が立ち上がっていた。眼の焦点が合っていない彼女は、突然布を引き裂いたような嬌声を上げる。

「きやはははははははははは! あきつ丸! 無駄だよ! もうお終いなんだよ! この泊地も、艦娘も、人類も!」

「当身っ」

あきつ丸がすかさず頸椎に手刀を入れると、雨見が意識を失い崩れ落ちた。それを彼

女はそつと座らせておく。

「何も見なかつたことにしておこう……」

姫級の深海棲艦は周辺の生物に強く影響を与えることが確認されている。動植物なら生態が歪められ、人間なら精神が侵食される。雨見は泊地棲姫の近くに長く留まりすぎたせいで、気が触れてしまったらしい。

「しかし一般に処置が早ければ症状も残らない。明石殿、ここは大人しく投降して、雨見殿を泊地で療養させるべきであります」

あきつ丸は明石にそう打診する。しかし彼女は答える代わりに単装砲を構えていた。その照準は、あきつ丸ではなく、雨見を向いていた。

「明石殿……何のつもりでありますか……?」

「あきつちゃんも、分かっているんですよ。私が何のためにこの場所までその子をもたらしてきたのか。分かつて、言っているんですよ?」

あきつ丸はたつた今絶望したように、はつとして明石を見つめた。彼女は、明石の意図を全て分かっていた。深海棲艦に泊地を売り、雨見をここで殺すつもりだという明石の意図を。しかし、それを認めることができなかつた。自分を仲間だと認めてくれた者を、どこかで信じたいと思っていた。この泊地の六年間の支えであつた雨見を殺す筈が無いと、どこかで考えていた。

「やめてよ、そんな目で私を見ないでよ」

悲痛な声で明石が言う。しかし手にした単装砲の照準に迷いは無い。まっすぐに、雨見の額を貫かんとしている。輝き——あきつ丸の幻燈機が光を噴出して輝き始めた。

「自分は……明石殿が、誘拐事件の犯人でなければいいと思っていました」

あきつ丸の声は、やり切れなさや怒りや悲しみで震えていた。そして、それに呼応するように、幻燈機の輝きも脈打つように増大していく。輝き——

「子供を攫つて、深海棲艦の餌にするような、明石殿が、そんな下衆でなければいいと。これ以上罪を重ねる必要はないと、そう願っていた……」

幻燈機は、ついに泊地棲姫の足元までをも照らしだす。頭になった、積み重なった子供の死体。裂かれた肉片。地面に転がっていた腕に、血液の付着した見覚えのある銀時計が巻き付いていた。アリの腕時計。

「貴様、楽に死ねると思うなよ……！」

あきつ丸は悔しさに涙を流していた。明石は冷ややかに言い放つ。

「私はね、艦娘をやめてみせるよ、あきつちゃん——」

言い終わるや否やや砲声が大気を劈いた。立ち上る硝煙の狭間で、あきつ丸は明石を睨みつけていた。雨見の体には傷一つついていない。

「指一本、触れさせないであります」

物質化した影で織られたボールが、雨見の体を包みこんでいた。砲弾は、その影に阻まれ、何も貫くことなく弾かれていく。明石が嘆息する。

「やっぱり意味不明ね、その兵器。タングステンの砲弾をこんな至近距離で防ぐなんて」
「影は、夜と亜鉛から合成されている。夜に落ちたこの空間で、あなたはこのあきつ丸に勝つことはできないでしょう」

既に洞窟全体に、幻燈機の光が及んでいた。光が強くなるほど濃く溜まる影の檻に、明石は完全に囚われている。壁面に浮かぶ影の妖精たちが、明石を見つめている。実体の無い艦載機が、鍾乳石のひだの間を暗躍する。

「なるほど、海上戦より、こういう狭い場所での対人戦に適してたのね。始めから、人を捕らえる為の武器だったんだ」

「喋っている余裕は無いでありますよ——影よ、拘束しろ！」

プロペラ音が鳴り響く。岩場から飛び出す実体化した固定翼機が二機、明石目掛けて風を切る。その機体の上にはそれぞれ十センチ二等身の小人が乗っていて、カウボーイの如く荒縄を手に振り回していた。

「お前の陰謀もこれで終わりであります！」

迫る固定翼機を前にして、しかし明石は自信ありげに笑った。

「今よ、夕立！」

そう暗闇に呼びかける。

「——ぼい?」

聞き慣れた声と共に、あきつ丸の背後から人影が飛びかかった。背中に衝撃を受けあきつ丸は地面を転がる。

「ぐああつ!」

その反動で幻燈機が転がり落ち、洞窟内の影がろうのように溶けて消えた。急襲を仕掛けた駆逐艦夕立は、そのままあきつ丸を締め上げる。

「ゆ、夕立……殿、どうして……?」

「ごめんね、あきつちゃん。難しい話は分からないけど、明石に邪魔が入ったらこうしろって言われてるっぼい」

夕立は言う。万力のような力で、あきつ丸の体を固めている。苦しみに、あきつ丸は呻いた。

「ありがと、夕立。あなたがいてくれて助かったわ」

「でも明石、ほんとにあきつちゃんが悪いことしたの?」

「うん。あきつちゃんは雨見ちゃんを誘拐しようとした悪い子なんだ。だから、しっかりと押さえておいてね」

あきつ丸の上で信じられない会話が成されている。

「ば、馬鹿な……そんなことがあるものか……！ 夕立殿……この深海棲艦の下にある死体の山が、見えていないでありますか……悪人がどつちなのか、分からないのでありますか……？」

「明石、あきつちゃん何か言ってるっぽい」

「ああ、あんまり間に受けちゃだめだよ？ 夕立から逃げようとして言ってるんだから」
——まさか、夕立殿にはこの惨状が見えていない？

あきつ丸の脳裏に夕立への疑問が生じる。明石に洗脳されている可能性に思い当たる。そして自分を放置して流れていく二人の会話に、彼女は自分が窮地に追い込まれているのを悟った。明石は、落ち着いたように言う。

「あきつちゃん。普段、この姫級は集合フェロモンを体内で作らないように、ある薬品を常に投与してあるの。でも今は、その効果を増強させる薬を注射してある。こうするとどういうことが起こるか分かるよね？」

「ま……さか……」

あきつ丸は最悪の状況を想像する。人員の足りない泊地の近海に、深海棲艦が跋扈する状況。

「私はその混乱に乗じてここを離れさせてもらうわ。悪いけどあきつちゃんも、そこでロストしたことになるってもらう。バイバイ、あきつちゃん——」

明石が冷酷に、あきつ丸を見下していた。

3—3. レ級

瀬戸は疲弊していた。深海棲艦の群れに囲まれ、岩場に立て籠もり、絶望的状况に陥っていた。始めはたつた一体の駆逐イ級を相手にしていればよかった。瀬戸は駆逐イ級の向ける射線から身を引き離すように海に飛び込み、イ級の心臓に向かって鋼鉄の隙間に銚を突き立てその活動を止めさせた。その反撃が、瀬戸にできる最後の手段だった。しばらくして血の臭いに惹かれたように深海棲艦が集まってきて岩場を取り囲み始める。瀬戸は乗ってきたボートを岩場の影に隠し、イ級に突き立てた時に折れてしまった銚を心許な気に眺めていた。

「クソツ、参った……」

一か八か、ボートを最大船速で走らせて逃げ出せないだろうか。しかし海上で補足された時、待っているのは無残な死である。瀬戸の頭上で砲弾が炸裂し岩壁が弾けた。岩の墾壕は天然のもので、当然完全なものではない。その隙間から、駆逐八級と瀬戸がお互いを同時に確認した。

「ぐっ……」

逃げ出そうとする瀬戸を八級が機械のような冷たさで狙おうとするその刹那、八級の

胴体が何かに撃ちぬかれ火を上げる。次いで、聞き覚えのある懐かしい声がした。

「提督——！ 探しましたよお、大丈夫ですか——！」

五月雨の音がする。

「提督、まだ死んでないよな——？ てやんでい！ おいてめえら、あたいの提督に手を出してみやがれ！ ただじゃおかね——からな！」

涼風が怒鳴っている。

「いつ提督が涼風のものになったんでち。っていうか親父趣味だったんでちね……」
「ろ——ちゃんもいますって！」

潜水艦たちも駆けつけていた。それぞれはその練磨された火力をもつて、深海棲艦たちを掃討し始める。圧倒する雷撃が、正確無比な射撃が、敵を確実に沈めていく。瀬戸は間近で艦娘たちの勇壯を見て、驚きの念に囚われていた。

「お前ら……こんなに強かったんだな……」

人間の規格を超えた力をその身に秘めた、戦う少女たち。海の上で舞う彼女たちの姿は、いつか遠く昔に読んだ物語の、ヴァルハラ of 戦いを瀬戸に想起させた。非現実的な光景から、魂の気高い闘いを連想したからだろうか。しかしすぐに、瀬戸は意識を現実に戻す。瀬戸はここにいない艦娘のことに気が付いた。

「五月雨！ 明石と夕立、あきつ丸がどこに行つたか分かるか？ それに雨見も」

「えっ、皆のことですか？ わ、分からないです……」

五月雨は戦闘中に突然質問されて戸惑う。瀬戸は一人考えていた。自分をここに招いた状況に策謀じみたものを感じ取っていた。考えたくは無いが、誰かが裏切った可能性。状況が混沌としていること。それから、海に出てからここに来るまで、自分のことをじつと監視し続けているどす黒い視線に、瀬戸は気付いていた。

戦いに気を取られている艦娘たちはまだ気付いていない。瀬戸が、一番始めにそれを発見した。その深海棲艦は、瀬戸の視界が届く限界の遠方からこちらを眺めていた。ぬらりと鎌首をもたげる龍のような白い尾部。色素の失われた肌と、黒いフードつきパーカー。こちらを小馬鹿にするように敬礼している、ぞっとするほど美しいその少女は、六年前、泊地を精神的壊滅状態にまで追い込んだ深海棲艦、戦艦レ級。当時この近海で初めて発見されてから、レ級は、諸海域に出没するようになった。そして、たった一体で幾つもの艦隊をロストさせた。ついた仇名が、小さくも巨大なる悪魔。海に出る者全てが、その存在を恐れた。

そのレ級が、戦う艦娘たちを眺めていた。五月雨が、自分たちに向けられているその熱烈な視線に気付いたのとほぼ同時に、レ級は跳躍した。そして飛沫を巻き立て、四人の艦娘の中心に着水する。

艦娘たちの表情が凍りついた。

「そんな……嘘……」五月雨が怯え、伊58が言葉を失う。

「こいつが……六年前の！」涼風が敵愾心を燃やしていた。

「ハハツ——サア、アソボウ！」

レ級が慣れたように喋り、艦娘たちに向き合つて戦いを始めようとしたその時、激流がレ級の体を突き上げた。

「ろーちゃん、あれが皆の仇だつて知つてるつて！ 手加減しません、はい！」

呂500が放つた魚雷の水圧で空高く吹き飛ばされたレ級は、しかし上空で身を翻し、周囲に艦載機をばら撒いた。レ級は呂500に視線を落とし笑う。

「マズハ、オマエカラカ——？」

「駄目！ 呂号、逃げるでち！」

伊58が叫んだ直後に、夥しい量の爆撃が呂500に降り注いだ。一同は叫ぶ。爆音に呂500の悲痛な呻き声がかき消された。爆撃が過ぎ去つたあと、そこに呂500の姿は無い。レ級が再び着水し、今度は五月雨に尾部の砲塔を向けた。超弩級戦艦の主砲だ、直撃すれば、駆逐艦の装甲が耐えられる道理はない。

「アハハハハハ！ 苦シメ、ソシテ死ネ！」

「うう、こんなところでええ！」

十六インチ口径から砲弾が繰り出される。五月雨は、舵を無理矢理に右舷側に切り、

それを間一髪で躲した。しかし、背後の岩場が轟音に砕け散る。五月雨がはつとして振り返る。

「嘘……」

「提督——！」

五月雨と涼風が提督の方を見た。初めから、レ級は五月雨と泊地の司令官が直線上に並ぶ瞬間を狙っていた。五月雨が躲せば、提督を失う。より精神的に苦しめようとするレ級の算段だ。

「そんな……また誰も助けられないの……？」

五月雨が、弾け消えてゆく泡のように呟いた。

着弾の衝撃に岩壁に叩きつけられた瀬戸は、朦朧とした意識で艦娘たちとレ級の戦いを見ていた。掠れゆく視界の中、逆上した涼風が、レ級に向かっていく。レ級は尾部を一閃、横薙ぎに切り払った。涼風の腹部に一筋の線が走り、そこから彼女の腸が溢れ出す。失血に意識を失って、涼風は海中に膝をつくように沈んでいく。レ級の笑い声が響いている。悪夢のような惨劇を見ながら、瀬戸は、無力感に意識が引き込まれていた。

瀬戸は思う。

——俺は、こんなところで何をやっているんだろう。

3—4. 瀬戸の回想

覚醒しているのか夢を見ているのか、曖昧な意識の中で、瀬戸は不思議な体験をしていた。瀬戸の体を暖かい黒い液体のようなものが包み込んでいる。眠っているような心地よい脱力感がある。視界は黒く覆われ、音も、匂いも無い。完全な虚無の中で、瀬戸は、指の間を透き通るわずかな粘性だけを感じていた。液体の底へ底へ、瀬戸は静かに沈み込んでいく。

そうして気付いたら、瀬戸は冷たい波の中の砂粒を握っていた。青空に、白々とした入道雲が浮かんでいる。遠くの丘の上に、田園と森が見えた。どこか懐かしいその風景。ここはどこだろう、そう思いながら瀬戸は腰を起こした。打ち寄せる波の音、海鳥の鳴き声。その合間に、すすり泣くような子供の声を聞いた。振り返ると、浜の中にダンボールを抱えた少年がぼつんと立っている。少年は、それを抱きながら、肩を震わせ泣いていた。瀬戸はその少年にも、ダンボールにも見覚えがあった。確かあの中には、子犬が二匹いた筈だ。

瀬戸が近寄ると、確かに、ダンボールの中で二匹の子犬が尻尾を振っていた。一匹の毛並みは茶色く、もう一匹は黒い。少年は子犬たちの前で、嫌だ、嫌だと繰り返して呟い

ていた。

瀬戸は気付く。ここは自分が少年時代を過ごした沖繩の海で、目の前の子供は、幼き日の瀬戸自身であることに。

瀬戸塔也が九つの頃のある夏の日、彼は森の中に捨てられた三匹の子犬を見つけた。うち一匹を抱いて家に帰り、父親に秘密で飼ってやろうとした。三匹も救ってやることはできない、だが、一匹だけなら、助けてやることができるかもしれない。彼はそう思つて、子犬に手を差し伸べた。

瀬戸は、母親の顔を知らない。父親の暴力に耐えられず、瀬戸が物心付く前に家を捨てたから。漁師である父は酒浸りで血の気が多く、日常的に瀬戸に暴力を振るつていた。そのせいで瀬戸は自己表現のしない、抑圧的な子供に育ち、友人が一人もいなかった。もし彼に仲間がいたならば、子犬を三匹とも彼らに託しただろう。その方が安全であることも彼には分かつていた。だが彼は、上手くやれると思つていた。父親に隠しながら、犬を育てることが、できると思つていた。

次の日である。彼が学校から帰つてくると、隠し場所に犬がいない。呆然として、それから怒りながら父親を問い詰めた。

「ああ？ あの馬鹿犬か？ 朝からうるせえから保健所に押し付けたよ。今頃は殺処分だよ殺処分。いいか、二度と畜生なんて拾つてくるんじゃねえぞ」

その言葉に瀬戸は衝撃を受けた。そして喚いた。気が動転した。そしてうつかり、他に二匹の犬がいることを口走ってしまった。

「なんだ、まだ犬がいるのか。それなら今から保健所に持って行ってもらおう。ああ？
うるせえな、泣くんじゃねえよ」

電話口に立とうとする父親の体に、瀬戸は猛然としがみついた。父は逆上し、瀬戸を叩き伏せる。土間に転がった瀬戸を踏みつける。保健所に連絡を取る父親の声を背に、瀬戸は慌てて森へと走った。

二匹の犬はまだ森の中にいた。瀬戸は、自分の不注意が彼らの兄弟を殺したのだと思っていた。自分が家に連れて帰らなければ、あの犬は死ぬことは無かった——そして今、この二匹も、危険に晒されている。瀬戸はダンボールを抱えて走る。どこへ行けばいいのか分からないまま。

村へと続く道を行きかけて、瀬戸の足は止まる。逡巡して、ダンボールを取り落としそうになって、それから来た道を引き返した。村には、漁師の繋がりがあつた。どうしても、父の耳に入るだろう。保健所も、村にある。同級生も、駄目だ。瀬戸は虐められてばかりで、彼らに優しくされた経験が無い。彼らは瀬戸が傷つくことなら何でもするだろう。少なくとも瀬戸にはそう思われた。彼には仲間がない。彼は一人だった。しかし立ち止まるわけにも行かない。

ついに、浜に出てしまった。瀬戸がいつも魚と戯れている海。瀬戸の唯一の居場所。彼は、何か意図があつてここに出たわけじゃないやなかつた。でも、もう行き着いてしまったと思つた。もうどこにも行き場がないと思つた。瀬戸は呆然と立ち尽くして、ダンボールをかき抱いた。濡れた頬を犬が舐める。瀬戸は、殺処分のことを考え、保健所に引き取られた犬のことを考え、犬の苦しみのことを考える。自分のせいで、その苦しみをこの二匹の犬が受けるのだと思うと、今すぐここから逃げ出したくなつた。しかし、手を離すこともできない。瀬戸の胸に悲痛な思いが込み上がり、目の前の犬の瞳を、じつと覗き込んだ。瀬戸は、ふと思う。

——いつその事、ここで殺した方が、苦しまないんじゃないか。犬を、この浜に埋めた方が、楽なんじゃないか。

自分の内側から突如湧いてきたそのような恐ろしい考えに、瀬戸の全身が恐怖に震えた。体中の熱が腹の底に落ちていき、喉がひりつくほど渴いた。そんなこと、出来るわけがないと思つた。それでも、瀬戸は本当に、その方が苦しまないと思つていた。楽に死なせてやった方が、良いのだと——一息に首を折り、埋めてやった方が——

「……………嫌だ……………嫌だ……………」

瀬戸はただ立ち尽くして、犬をどうすることもできない。己のあらゆる無力が、悔しくて仕方がない。

「……………嫌だ……………殺したくない……………嫌だ……………」

大人になった瀬戸は、その少年を見つめていた。この一連の光景は、瀬戸の心の核となつてゐる原体験だ。瀬戸は今、その記憶を追体験してゐるのだと気付いた。だから瀬戸は知つてゐる。この後に、何が起こるのか。瀬戸は浜に立つ少女の姿を見た——

「……………助けたい……………助けてやりたい……………誰か……………」

潮風が、吹いた。

「私が、助けてあげようか？」

少女が、少年にその声を掛ける。見上げる少年に、少女は微笑みかけた。白いワンピースに麦わら帽子、夏の空に、黒髪が美しく流れている。

「私があなたの味方になつてあげる」

そして、悲嘆にくれてゐる少年の手から、少女はそのダンボールを引き取つた。

「飼い主になつてくれる人を探してゐるんだよね？ この子たちの面倒は、私が責任を持つて見るよ。だから、安心して」

瀬戸はその少女の顔を見る。彼は今、忘れていた原体験の全てを思い出してゐた。今まで何故か思い出すことのなかつた彼女の姿が、瀬戸の記憶の欠落してゐた部分を埋めていた。彼は思い出す。彼女の名前。彼女の姿。自分が何故、海軍に志願しようと思つたのか、その深層の理由を、彼女が担つてゐる——自分を救つてくれた少女が、照れた

ようにはにかんだ。

「私ドジだから、自分のこともちゃんとしなきゃいけないんだけどねっ」

少年はその時、五月雨と出会っていた。

少年瀬戸は、その後数ヶ月間、この浜で五月雨と会うようになる。彼女は遠征でこの土地に来ていのだと言った。自分と同じ歳にしか見えない彼女が仕事をしているのを聞いて、彼は少なからず驚いた。必ず浜に犬を連れてきた少女は、少年と遊び、様々な話をした。彼女は自分が自国に試験導入されている艦娘だという話はしなかったし、少年も仕事の詳しい話を聞かなかった。それでも瀬戸は彼女を尊敬する。自分も何かを守るような、強い人間になりたいと思った――

その後瀬戸は慌ただしい日々の中で、その思い出を忘れていく。海難事故で父が死に、中学に上がると同時に東京の叔母夫婦のもとに養子として引き取られる。全てをやり直すつもりで臨んだ新しい日常は、思いの他平板で順調で、瀬戸は周りの同級生と何ら変わらない生活を送っていた。だから、漠然とした将来像も持てないで臨んだ進路選択で、ふと頭に浮かんだ行き先を迷うことなく紙に書いたとき、瀬戸は初めて自分自身を知ったような不思議な思いに囚われたのだ。

海軍士官学校。用紙にはそう書かれていた。

大人になった瀬戸は、今でもその時身に沸き立った希望の感覚を覚えている。

4-4. エピローグ

呂500が海岸に立つ。闇夜の中に、波の音が打ち寄せていた。彼女の瞳から、一粒の涙が溢れ落ちる。

「でつちー……」

レ級との戦いから一週間が経った。あれから毎晩、呂500はこの海岸に赴き、伊58との日々を追憶している。この地で彼女と共に過ごした、美しき日々たち。今やそれは遠い過去のものとなってしまった。彼女はもう、呂500の傍にいないのだ。これから、呂500は一人で生きていかなければならなかった。

自分は、親友なしでやれるだろうか。まだ、そのような強い気持ちになることは到底できそうにない。辛い時、悲しい時は、またこの海岸に来てしまうだろう。それでも今は、強がつて前に進んでみよう。頑張っている自分を見て、伊58も喜んでくれるに違いないから。

「でつち。ろーちゃん、もう行くね……」

呂500は、親友に別れを告げる。胸が悲しさに満たされて、どうしようもなかった。

「あばよ……でち公——」

そう呟いて海岸を去ろうとする。その時、呂500の耳に、微かに誰かの声が聞こえた。

それは懐かしい声である気がした。

はつとして、近くからしているその声を辿って草木を掻き分けてみると、そこにはあの日ロストした筈の伊58が小さく縮こまっていたのだ。

「死んでねええええでちいいいいい！」

彼女は歯を鳴らし体を震わせ、掠れた声で叫んだ。

「で、でつち……………」

呂500は余りのことに放心する。

「ハア……………寒い……………寒いでち……………ありえない……………目が覚めたら真つ暗な洞窟の中に流れ着いて……………一週間水だけで彷徨い続けるなんて、ありえないでち……………寒い……………声が……………もう出ない……………暗いの怖い……………寒いでち……………帰りたい……………泊地に帰りたいでち……………」

朦朧とした意識で呟く伊58に呂500は頭から突っ込んだ。

「痛あつ！」

「でつち！ でつちいいい！」

呂500は泣きながら擦り寄って、涙や鼻水を伊58の頬にこすりつけていた。

「わぶつ、ろ、呂型、汚いからやめるでち！ あ、でも温かい」

「でつち、ろーちゃん会いたかった、会いたかったよお……」

懷で泣きじやくる呂500を眺めていると、伊58も体の力が抜けてしまった。

「はいはい……私は生きてるよ」

「でつち、もうどこにも行かないでつて」

「行かないよ。もう洞窟はこりこりでち」

呂500の肩を抱いて、伊58は溜息をついた。それから彼女の体温を感じて、やっぱり温かいと伊58は思うのだった。

「おかえり、でつち」

「ん……、ただいま」

少し照れたように、伊58が言う。

三日後に、あきつ丸と明石が泊地を発つて本国へ向かった。泊地の環境はまた少しずつ変わっていく。それでも彼女たちの、共に戦った仲間を思う気持ちが変わることはないだろう。失われた人々を悼みながら、彼女たちは、今日も前へと進んでいく。了

4—1. あきつ丸VS

「ぐああつ……！」

冷たい土の上に、あきつ丸の体がねじ伏せられていた。夕立が、その小さな体からは考えられないほどの力で、あきつ丸の関節を極めている。体のどこも動かせない状況に、夕立の近接格闘術の境地の高さが見て取れる。あきつ丸は歯噛みして、明石の背中を睨むしかなかった。彼女の武器である幻燈機は、一メートル以上離れた地面に転がっている。万策尽きている分、あきつ丸は精神的に激しく抵抗したくて、感情が滅裂にかき混ざっていた。

「バイバイ、あきつちゃん——」

明石が、敗北者であるあきつ丸を置いてこの場を去ろうとする。雨見の命を救っただけでも彼女が戦った価値はあったのだらうと、相手を認めながら。あきつ丸が、自分に向かって何かを言っている。

「どうして……どうして明石殿はこんなことを企てたのでありますか……。深海棲艦の技術を使って、あなたは何をしようというのか……」

あきつ丸は、裏切りの動機を聞いていた。明石は最後にそれくらいは答えてもいいか

と思う。何せ大したものではない。

「いい加減ね、新しい視点に立ってみようと思ったの」

明石は言う。

「そもそも私が艦娘になったのも、一番根底の理由を辿れば、新しい人間の生き方に興味があつたからだし。今の私は、次のステップに興味がある。ここ数年で、私は一つのところに留まりすぎたわ」

進化することをやめた生命は、死んでいるのと同じだと、彼女は思う。

「深海棲艦に怯えて過ごす一生なんて、下らないと思わない？ 手始めに、私は自分の体を極限まで深海棲艦に近づけるわ。そうして彼女たちと同じ目線に立ってみたい。私は、新しい生命を知りたい」

「そんな……下らない理由で、仲間を裏切ったのでありますか……？」

「そんなに下らないかなあ？」 明石は首を傾げる。

ああ、あなたは思い違いをしている。あきつ丸は腹の底から込み上げてくる怒りを感じていた。

「あなたが逃げた先に、あなたの求めているものは……無い。過去を断ち切ったあなたは、最早あなた自身を繋ぎ止めることはできない。明石殿、自分を誤魔化すなよ」

「私あんまり、哲学の話は好きじゃないな。そんなの、やってみないと分からないじゃない」

「い

明石は、あきつ丸の反抗的な眼をじつと覗き込んでいた。

「私、こうして本音同士で話すまで、あなたがそんな熱血な人だったなんて思わなかったわ。」

……それじゃあ、言いたいことも言ったし、そろそろ行くね」

そうして、今度こそ明石が去ろうとした時、ふと夕立が不安げに尋ねた。

「明石……ちちゃんと約束守ってくれるよね？ 明石のこと手伝わたら、私との約束を守ってくれるんだよね？」

「どうしたの夕立。そんなの、当たり前じゃない」

「本当に、明石の言うことを聞いたら、武蔵と時雨が、泊地に戻って来るんだよね？」

夕立の問いに、明石は微笑んだ。

「うん——」

あきつ丸の中で、何かが音を立てて切れた。

「うおおおおおおおおお！」

そう咆哮しながら、全身に力を込める。あきつ丸の体が、ゆっくりと持ち上がる。

「夕立！」明石が厳命する。

「ちよ、あきつちゃん！ 今動いたら腕、折れるっぽい——」

夕立は限界を超えて無理に動こうとするあきつ丸にたじろいでいた。夕立を引きずりながら、彼女は這うようにして地面を移動する。

「夕立、何やってるの!」

「こ、これ以上は駄目!」

折れる! と判断して、夕立は咄嗟に身を離してしまった。彼女はあきつ丸を押さええるには優しすぎた。あきつ丸の手に、再び走馬灯が灯る。

「明石殿は絶対にやってはならないことをした——自分を怒らせた。それだけで、この技の発動条件に足る……」

走馬灯が、これまでにない不規則な輝きを放った。点滅する光が、洞窟内を瞬間的に照らしだし、またすぐに暗闇が視界を埋め尽くす。その明滅の間隔が、段々と短くなつていく。この感じを、明石は知っている。

「な、なに……? また影絵? あんなもの、誤魔化しだつて分かつてるんだから……」
そうは言つても、どこからか込み上げてくる恐怖を明石は振り払うことができなかった。鼓膜の奥から、音が聞こえている。明石は咄嗟に耳を塞いだ。しかし、それは明石の中から聞こえてきていた。それは、少しずつ自分の方へと近づいている。戦闘機のプロペラの音。艦娘が発艦させる艦載機よりもリアルな、本物の重厚なプロペラ音。

空間の明滅の周期がついに知覚できないほどに短くなつていった。それは映写機の

映像を見ているような、知覚が細切れにされたような感覚を明石に与えていた。既に洞窟内は洞窟の形を取っていない。網膜に映る映像を見ているのか、脳が幻視する世界を見ているのか、明石には分からない。ただ、心の奥底、深い深い層の底に、自分が落ちていくのを感じていた。眼を開いていても閉じていても、常に形を変え続け溶けていく洞窟の壁面が見えていた。明石は自分の精神に何か他のものが入ってくるのを拒めな
いでいた。それは、自分自身だった。

戦闘機の音、サイレン、家が焼け弾ける音、泣き叫ぶ声。明石は、焼け野原の中に呆然と立っていた。黒煙で埋め尽くされた空を焼夷弾を積んだ爆撃機が飛んで行く。遠方に火が上がっている。煤と腐臭が渦巻いている。骨と皮ばかりの子供が道に打ち捨てられていた。

明石は一人、耳を塞いで蹲るしかなかった。

「二九四五年の走馬灯——艦娘の集合的無意識にプログラムされた光景を、強制的に呼び起こす機能であります。暴走した艦娘を無力化する手段として、この装置は作られました。一度この光を見てしまえば、如何なる防御手段も存在しません。しばらく、そこで眠っていて下さい明石殿」

通常モードに戻った走馬灯が、洞窟内をぼんやりと照らしていた。地面に倒れ伏しているのは、雨見、夕立、明石。夕立には悪いが、彼女も明石の巻き添えを受けてもらっ

た。あの光には、艦娘の洗脳を解く力もある。直に、全てを思い出すだろう。

あきつ丸は、懐から骨董物の短剣を取り出す。鞘から刀身を抜くと、くすみ一つない鋼が顕になる。彼女は泊地棲姫の前に立ち、その心臓に向かつて、刃を深々と突き立てた。

4—2. レ級2

瀬戸は目を覚ましつつあった。心地良い夢の中から体を引き抜くように、意識が惨劇の中に戻っていた。そして始めに瀬戸が見たのは、レ級の腕に胴体を突き破られる、五月雨の姿だ。その腕が引き抜かれると、落下するように彼女は海水に沈んでいく。その間に一度だけ、五月雨と瀬戸は目が合った。痛みに涙を浮かべて、彼女は海に没した。「アハハ……モウオワツチャツタ……」

他に、艦娘の姿は見えない。艦隊は全滅したのだ。レ級は消沈して、破壊の後の余韻と虚脱感に浸っているように見えた。

その時だった。不意に、レ級は顔を上げ、浜の方を向いて固まった。目を見開き、どこか遠くを見ているようだった。実際には、レ級は泊地棲姫の生体反応の消失を感じ取っていた。レ級が自分の役目を忘れて遊び興じている間に、本来の目的が失われてしまったのだ。六年前に沈んだ筈の泊地棲姫を連れ戻すために、ここまでやってきたというのに。

泊地棲姫のことを知らない瀬戸は、遠方を眺め続けるレ級の様子に違和感を覚えていた。レ級は他に何にも注意を払っていなさそうにしている。しかし、それが自分を誘い

込むレ級の罨のようにも見えた。

咄嗟に瀬戸はポケットから軍用ナイフを取り出し、折れた銚の先にあてがい、ベルトできつく縛る。出来上がった即席の槍の頼り無さに、自分は自棄になつていられるのかもしれないと思つた。

——こんなものであいつを倒せるとでも？ 奴の外皮は砲弾を防げるのに？

レ級は未だこちらに気付いていないように見える。本当に隙があるのかは分からないが、しかし見つかつたら、今度こそ終わりだろう。今、瀬戸が些細な抵抗する必要が無いのは自明なことだ。瀬戸には陸に残してきた者たちがいる。ここは死んだ振りでもしてやり過ごして、泊地に戻つて、新たな策を立てればいい。本国に支援を要請すればいい。それが司令官たる自分の役目に違くない。瀬戸は槍をその場に打ち捨てようとした。

瀬戸の脳裏に、沈みゆく五月雨の姿が焼き付いている。彼女が受けた苦痛が、瀬戸の胸から染み出してくる。部下を捨てて逃げる。今からしようとしていることは、そういうことだ。

恩人を捨てて逃げる——そんなことが、俺に出来るだろうか？

瀬戸は槍を構えた。狙うならば体の隙間、それも重要な器官がある場所がいい。なるべく深いダメージを。そう考えて、横を向いているレ級の頸動脈を狙う。距離は目測で

八メートル。威力は死なないだろうが、角度が悪い。だが、やるしかない。瀬戸は、レ級を目掛けて、槍を振りかぶろうとした。

勢いづいた左足のつま先が、岩場の石ころを蹴り飛ばす。それが転がって、海中に落ちた。

「しまっ——」

水面の音にレ級が振り向いた、その時。

圧縮された暴風のようなエネルギーが、海底から突き上がった。水柱が、レ級の体を包み込む。それは、轟沈した五月雨が海底から射った最後の酸素魚雷の爆圧だった。その圧力は、レ級の身動きを完全に抑止する。暴れ狂う海水の重みが、レ級の体の自由を奪う。これまでダメージが蓄積されてきた外皮が圧力に耐えかね決壊し、亀裂が駆け巡った。レ級は、驚いたように水柱の外に手をかざしている。

瀬戸が、渾身の力で槍を投げた。

空気を切り裂いて突き進む飛来物をレ級はその刹那で捉え、片腕で弾こうとする。しかし自由の効かない腕はそれを弾くまでには至らなかつた。レ級の濡れた外皮の表面を槍は滑る。その仰角が変わる。そして槍はまるで吸い込まれるように、深々とレ級の眼窩に突き刺さった。それは脳にまで達し、レ級をレ級足らしめる機能を完全に破壊した——

「グアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

獣の如き咆哮を上げ、レ級の全身は不規則に脈打つ。顔面を押さえながら天を仰ぐレ級は、この世のものとは思えない唸り声で苦しんでいる。ついには海面へと崩折れる。レ級の脈動が止まった。

レ級は、四足歩行の獣のように瀬戸に向き合った。顔を上げたレ級の眼球は真っ赤に染まつて、あらゆる方向を向いていた。血液混じりの脳漿が滴り落ち、もうあれに意識は無いように見えた。

しかしレ級の尾部の、鎌首が高々と持ち上がる。その蛇の頭が、まるで現在のレ級の頭部の代わりのように静かに呼吸をしていた。冷ややかに瀬戸を見つめる蛇。レ級はまだ生きていた。

まるで二体で一つの生物。否、あれは初めから、二体で一つだったのだ。瀬戸は自己より遥かに高い次元にいるこの生命体に殺されることを確信した。

しかしレ級は瀬戸に背を向ける。その動きは昆虫のように冷静で、迷いがなかった。怪物は戦線を離脱した。命令系統を尾部へと移したレ級は、撤退の判断を下して、海上を獣のごとく駆けていった。

高速船以上の速度で走るレ級を呆然と見ながら、瀬戸は数秒の間放心していた。しかしすぐに、自分のすべきことを思い出す。瀬戸は海の中へと潜った。救わなければなら

ない命があつた。

泡が瀬戸を追い越していく。薄暗い、音のない海の底に、五月雨の体があつた。船底に穴の開いた沈没船のように、彼女は静かに横たわっていた。安らかに眠っているようにさえ見えた。瀬戸は彼女を抱き上げて、光の差す方を目指す。

浮上して、瀬戸は岩の上に五月雨を寝かせた。レ級から受けた一撃の傷が、貫かれた筈の腹部が、既に塞がりかけている。これが艦娘の生命力だつた。戦い、戦い尽くして、その身を海底に沈めるまで、生命活動をやめない艦娘たち。もういいじやないかと瀬戸は思う。これ以上、苦しむ必要はないじやないか。こんなに悲痛な思いをしてまで、誰かの為に戦う必要はない。彼女たちは気丈に振る舞うけれど、張り裂けそうな心を、今まで何度無理矢理に押さえつけてきたのだろう。

救い——

救いとは、何だろう。

瀬戸は、五月雨の首に手をかけていた。

幼い自分に出来なかつたことでも、今の自分になら出来るだろう。俺は強くなつた。あの時よりもずっと。

——……………嫌だ……………嫌だ……………

今も、心の中で声が聞こえる。

——…嫌だ…殺したくない…嫌だ…

幼い自分がダンボールを抱えて泣いている。

——…助けたい…俺は本当に…この人を助けてやりたいんだ…

潮風が吹いた。

4—3. 帰還

浜で雨見が手を振っている。そこを目印に、瀬戸はボートを乗り付けた。負傷した艦娘たち、五月雨、涼風、呂500がボートの上に横たわっていた。瀬戸は雨見の元に飛び降りて、彼女の体を抱きしめる。

「お、お父さん、苦しいよお！」

「良かった……雨見……生きていてくれて……」

「お父さん……？」

雨見は、体越しに瀬戸の張り詰めた肩の力が少しだけ弛緩したのが分かった。そして腕の隙間から、後ろのボートの様子が目に入る。

「み、皆どうしたの！ 怪我してるよ！」

雨見は瀬戸の腕の中をもがいて抜けだすと、ボートの方へ駆け寄った。涼風の負傷が最も酷く見え、腹部からの出血が止まっていない。しかし微かだが全員に呼吸があり、脈拍もある。あの惨劇から、瀬戸は三人の艦娘を生還させていた。

「戦いがあったんだ。だが、きつと助かる、泊地に運び入れれば……」

瀬戸は雨見を諭すように言う。彼女はこの場に一人が足りないことに気付いていた。

「……ゴーやお姉ちゃんは……?」

雨見の間に、瀬戸は黙して首を振った。あの海から瀬戸が連れ戻せたのは、三人だけだった。伊58の姿は、見つからなかった。

瀬戸は、雨見が手に持っている機械に気付く。

「雨見、それはどうしたんだ?」

その手には、あきつ丸の走馬灯が握られていた。問われて思い出したように、雨見はそれを瀬戸に差し出す。

「あきつお姉ちゃんが、お父さんに渡してほしいって。この戦いに決着をつけるんだって言ってた。雨見、何のことだか分からないけど……」

走馬灯が瀬戸の手に渡った。機械が起動して、光を放っている。岩陰に映すと、ある映像が見えた。それはあきつ丸の観測機が映している、海岸に立つ明石の姿だった。

寸刻前。

地下の洞窟で泊地棲姫の心臓に短刀を突き立てたあきつ丸は、夕立と雨見の意識を取り戻させた。もともと二人に掛かっていた洗脳自体は走馬灯の力で解除されており、気のついた二人は洞窟内という異様な場所に不思議そうな顔を浮かべていた。

「あれ? 私、何でこんなところにいるっぽい?」

しかし、明石の姿だけ、どこにも見られない。あきつ丸が泊地棲姫に向き合っていた

間に、明石は自分の力で意識を覚醒させ、洞窟を抜け出したのだ。それに気付いたあきつ丸は、夕立と共に、明石を後を追っていった。雨見に、走馬灯を託して。

そして現在、波濤の前に明石は一人で立っている。彼女は誰にも見つからず、密会場所にまで辿りつけたと思っっている。その海岸沿いの岩場の陰を、観測機が遠方から監視している。明石は相手を待っている。

間もなく沖から現れた者の姿に、明石は動揺の表情を浮かべた。

「驚いたわ……随分酷くやられたみたいね」

レ級は、全身に亀裂を入れ、顔の一部が砕け、かつての余裕ある姿を失っていた。しかしその分、人間を模した表層から機械の部分が覗いているような、非生物じみた不気味さが増している。対面する明石は額に汗を浮かべた。

「約束通り……深海棲艦の技術を渡してもらおうわ」

明石は生唾を飲み込みそう言う。レ級の真っ赤になった片目が明石を向いた。

「ヤクソク……？ ヒメハ、シン……ダ……。コウシヨウハ……ケツレツシタ……」

明石は単装砲の照準を、レ級に向ける。

「ええ。でも、技術自体は持ってきている筈よ。そうでないと元々交渉にならないからね。ここであなたからそれを奪って、私は逃げさせてもらう」

「アハハ……ソノオモチャデ……？ ジブンガ何ヲ言ツテイルノカ……ワカツテイルカ

……?」

「満身創痕のあなたになら、今の私でも勝てそうよ……!」

明石は震えそうになる自分の手を押さえながら、レ級の眉間に照準を合わせていた。彼女はもはや、全ての退路を絶たれ追い込まれている。泊地棲姫のロストを知っているレ級が何故この場所に來たのか、その理由を考えることもできない。

「ワカッタ……クレテヤロウ……ワタシタチノチカラ……ギジュツノスイヲ……」

レ級の肯定的な返答に、明石が一瞬氣を取られた。その隙に、レ級の蛇尾が、滑るように明石の体に巻き付く。

「な、何……何のつもり……」

「ワレワレノギジュツハ……スベテワレワレノナカニ……」

レ級の頬が耳元まで裂ける。人間の頭程度優に食いちぎりそうな獠猛な牙が剥く。

「オマエハ……ハジメカラ……ワタシニ喰ワレルウンメイダツタトイウコトダ……」

明石は漸く悟る。レ級が負傷した体を治す為に明石を喰らいに來たことを。初めから自分に逃げ場など無かつたことを。

「オマエハ……ワレワレトヒトツニナル……ソレガオマエノ望ンダコトダロウ?」

——違う。

その一言は、死の恐怖に吞まれて、昏い水底に沈んでいった。

明石は見た。六年前から自分を縛っていた鎖が、音を立てて切断されていくのを。救いのないこの世界が、真つ二つに断ち切られるのを。明石の目には、自分を絶対に見捨ててはくれないこの友だちの姿が焼き付いていた。どうして今まで気付かなかつたのだろう。夕立は、友だちが地獄に落ちるなら、一緒に地獄の底にまで付いてきてしまうような少女だったのだ。

夕立に救われていたのは、私の方だ——明石はそう思う。

二つに裂かれたレ級が、水底へと沈んでいった。岩場は真つ赤に染まり、返り血塗れの夕立が、明石に振り返って無邪気に笑いかけた。

「おかえり、明石」

その声を聞いた明石は、その場で崩折れてしまった。声を上げて、夕立の膝で泣いた。あきつ丸が崖の上から岩場へと滑り降りてくる。

「いやあ……凄まじい光景でありますな……。この場面だけを見たら、誰でもとりあえず通報するでしょうな、うん」

そうして彼女は埃塗れになった制服のスカートを手で払った。

「……あきつちゃん……私は、罪を重ねすぎたね」

明石が涙声で言う。あきつ丸は、血に濡れた地面の滑りやすさを恐る恐る確かめていた。

「……あなたはこんなことになる前に逃げるべきだったんだ、明石殿」

少し、苛立ったように言っていた。そして、わざと観測機が拾える声量で話していた。「あなただけじゃない。この泊地の者たちは、全員大馬鹿者であります。六年前に敗北した時点で、逃げたら良かった。艦娘なんて、辞めてしまえば良かったんだ」

「あきつちゃん、もう全部終わったんだからよくないっぽい？」

夕立が明石の頭を撫でながら言う。

「いや、終わってないよ……」

明石は言う。

「私は罪を償わなきゃ」

明石はあきつ丸によって勾留され、軍事裁判に掛けられることが決まっている。その運命は変えることはできない。

しかし、あきつ丸は言う。

「明石殿は、泊地棲姫に操られていたのでありますよ」

明石は顔を上げた。

「嘘」

「否。艦娘がいくら姫級の精神攻撃に耐性があるとはいえ、六年間も近づき続けければ、マインドコントロールが掛かってしまうであります。明石殿は知らず知らずのうちに、動

けない姫級の為に働くようになっていた」

「嘘、嘘よ……」

否定する明石に、あきつ丸は言う。

「明石殿。あなたは、深海棲艦と無線通信をした時の会話の内容を、自分で覚えているではありませんか？」

明石は、ぞつとしたような顔を浮かべた。

「覚えて……ない——」

「ええ。なぜならあなたは、深海棲艦と無線通信なんてしていないから。あのカセットテープは、自分が村の電気屋で買ってきた空のテープであります」

明石は呈示された事実を受け止めきれず、地面に手を突いた。

「つまり姫級とレ級は、あなたを介さずに何らかの別の手段で連絡を取り合っており、引き渡しの際のみに、あなたを利用した。なぜなら泊地棲姫は四肢をもがれており、移動には内部協力者が必要だったから。そして決行の日取りの情報漏洩を極力防ぎたかつたから。そのため、あなたの頭に入っているのは、引き渡し現場であるこの場所の情報のみであるはずだ」

明石の無言が、あきつ丸の推測を肯定していた。

「どこまでが明石殿の意志で、どこまでが明石殿の恐怖につけ込んだ泊地棲姫の意志

だったのか、詳しくは精神鑑定を受けてみるまで分からないですが、裁判では、自分が証人に立つてあります。明石殿の罪はかなり減刑されるだろう」

あきつ丸の見立てでは、多くても数年の拘留である。当初の罪状では処刑は不可避であつたから、随分と軽くなった。つまり、戦いはこれからだということだ。

「はは……なんだか、頭がおかしくなりそう。ずっと、私が私じゃなかつたなんて……。それに、あなたにも酷いことされたしね」

「あれは、悪かつたでありますよ。ああするしかなかつたし」

走馬灯の無意識を制御する機能について言及していた。その点では姫級のマインドコントロールと同じことをあきつ丸は明石にしていた。

「あれ？ 私巻き添えを受けたつぽい？」夕立が呟く。

「はは、気のせいではありませんよ」

あきつ丸は嘘をついた。

それから、近寄つてきた観測機に向かって言う。

「こつちは、全部終つたであります提督殿。すぐに、明石殿と夕立殿と共に、そちらに向かいます。治療を手伝うであります」

水平線に太陽が沈んでゆこうとしていた。空も海も全てが燃えている。燃え尽きる瞬間に、世界が、生きよと言っているようだった。ならばもう少し、頑張ってみよう。あ

きつ丸は柄にもなく、そう思った。

泊地。走馬灯からあきつ丸の伝令を受け取った瀬戸は、艦娘たちの応急手当に手を動かしていた。

「了解した」

そう一人呟いた。

4—4. エピローグ

呂500が海岸に立つ。闇夜の中に、波の音が打ち寄せていた。彼女の瞳から、一粒の涙が溢れ落ちる。

「でっちー……」

レ級との戦いから一週間が経った。あれから毎晩、呂500はこの海岸に赴き、伊58との日々を追憶している。この地で彼女と共に過ごした、美しき日々たち。今やそれは遠い過去のものとなってしまった。彼女はもう、呂500の傍にいないのだ。これから、呂500は一人で生きていかなければならなかった。

自分は、親友なしでやれるだろうか。まだ、そのような強い気持ちになることは到底できそうにない。辛い時、悲しい時は、またこの海岸に来てしまうだろう。それでも今は、強がって前に進んでみよう。頑張っている自分を見て、伊58も喜んでくれるに違いないから。

「でっち。ろーちゃん、もう行くね……」

呂500は、親友に別れを告げる。胸が悲しさに満たされて、どうしようもなかった。

「あばよ……でち公——」

そう呟いて海岸を去ろうとする。その時、呂500の耳に、微かに誰かの声が聞こえた。

それは懐かしい声である気がした。

はつとして、近くからしているその声を辿って草木を掻き分けてみると、そこにはあの日ロストした筈の伊58が小さく縮こまっていたのだ。

「死んでねええええでちいいいいい！」

彼女は歯を鳴らし体を震わせ、掠れた声で叫んだ。

「で、でつち……！」

呂500は余りのことに放心する。

「ハア……寒い……寒いでち……ありえない……目が覚めたら真つ暗な洞窟の中に流れ着いて……一週間水だけで彷徨い続けるなんて、ありえないでち……寒い……声が……もう出ない……暗いの怖い……寒いでち……帰りたい……泊地に帰りたいでち……」

朦朧とした意識で呟く伊58に呂500は頭から突っ込んだ。

「痛あつ！」

「でつち！ でつちいいい！」

呂500は泣きながら擦り寄って、涙や鼻水を伊58の頬にこすりつけていた。

「わぷつ、ろ、呂型、汚いからやめるでち！ あ、でも温かい」

「でつち、ろーちゃん会いたかった、会いたかったよお……」

懷で泣きじやくる呂500を眺めていると、伊58も体の力が抜けてしまった。

「はいはい……私は生きてるよ」

「でつち、もうどこにも行かないでつて」

「行かないよ。もう洞窟はこりこりでち」

呂500の肩を抱いて、伊58は溜息をついた。それから彼女の体温を感じて、やっぱり温かいと伊58は思うのだった。

「おかえり、でつち」

「ん……、ただいま」

少し照れたように、伊58が言う。

三日後に、あきつ丸と明石が泊地を発つて本国へ向かった。泊地の環境はまた少しずつ変わっていく。それでも彼女たちの、共に戦った仲間を思う気持ちが変わることはないだろう。失われた人々を悼みながら、彼女たちは、今日も前へと進んでいく。了